
Link

2

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Link

【Nコード】

N9656W

【作者名】

2

【あらすじ】

前世は存在する——ある秋の夜、八坂洋一は小さな町の駅で『旅人』に出会い、生まれ変わる前の記憶を取り戻す。迷いを振り払い、遠く離れた海沿いの町へ旅に出る。かつての自分が暮らしていた町、十七年ぶりの帰宅、結生との再会。そして、前世の自分が犯した事件の被害者、『環』が八坂の前に姿を現す。二つの生を結ぶ、つながりの物語。

1 プロローグ

前世があると信じたことは、これまで一度もなかった。

理由は簡単だ。お化けやサンタクロースと同じこと。僕は前世などという概念を信じない。誰も証明したことがないのだから。したがって、前世があると言いふらす人たちも、どこか胡散臭い人たちだと思っていた。

前世などという実体のないものを追い求めるより、もっと自分のためになることに人生の気力を注ぐべき……以前の僕はそんな考えを持っていた。

だが、世の中は僕が思うよりも、ずっと広がった。

その広さに、僕の考えも変わっていった。

……僕自身が、前世の記憶を取り戻したのだ。

死んだ人間は、再びこの世界に生まれ変わる。あの旅人の言葉を、僕は認めるしかなかった。

「がー！ もう嫌だ、疲れた！」

勉強を始めてから三分ほどで、持田は音を上げた。目の前には山のような問題集と参考書。ノートは新品同様の空白。僕は友達として情けなくなった。

「まだ一問しか解いてないだろ。それじゃ今度のテストに間に合わないよ」

「だってよー、わかんないところばかりだもん」

「普段復習しないからつけが回ったんだ。勉強しないとわからなく

て当たり前」

聞く耳持たず、というふうには持田は机に突っ伏した。勉強を教え
てと言った当の本人は、早くも諦めムード。

僕は仕方なく持田の教科書を取った。

「……これか。式をグラフで表せばずっと楽になる。三十秒で解けるよ」

「でもよ、どんなグラフを書けばいいのかわかんねんだ」

「じゃあ解く前にまず公式を覚える。でないと赤点はまず確実だろうね」

今度のテストで赤点をとるようなら、持田は留年の危機に陥る。

勉強をしてこなかったのは自業自得だと思いつつも、クラスの級長として、そして友達として放っておくことはできなかった。テスト勉強を手伝っているのもそうした理由からだ。

放課後、僕はこうして図書室に居残って持田の面倒を見ていた。

ただ、中々成果は上がらない。

「勉強なんてさ、ほどほどにやればいいじゃん。ねえ」

「……それ、学期半ばにしてはや留年寸前の君が言うセリフじゃないよ」

「はっは、まあそうだな」

半ば冗談で言ったのだろうけど、僕にはあまり面白くない。

クラスの大勢の生徒は、持田のようなことを真顔で言いのける。

ほどほどにやればいい、嫌いなことはやらないでいい……僕からすれば、逃げ口を叩いているようにしか見えなかった。学ぶことを嫌がる人間は、きまって怠惰になる。これは僕の持論だった。

勉強ができるということは、つまり学ぶ力が養われている、優秀な人間である証拠なのだ。そして僕もまた、そうあるべきだと信じている。

「まもなく閉館時刻となります。校舎に残っている生徒は速やかに下校してください。繰り返し連絡いたします……」

ノートから顔を離すと、持田は帰る準備を済ませていた。その後の時計は、日没時刻を過ぎようとしている。

「帰ろうぜ！」持田は元気よく言った。

僕は溜息を吐いた。

電灯が街をほのかに照らす日暮れ時の通学路を駅の方へ進む。

同じく図書館でテスト勉強を続けていた生徒たちが何人か、僕たちの前を歩いていった。

「くああ……俺こんなに勉強したの久しぶりだぜ。まったくよ、お前はあんなに座りっぱなしで腰が痛くならねえのか？」

「別に。それより持田って、家で復習とかしないの？」

「俺はやらん！」

そんな自信たっぷりと言わないでくれよ。

本来自分のテスト勉強に充てるはずの時間をこの人の手伝いに費やしたんだから。

それで堂々と赤点とってもらっちゃ困るんだよ。

……そう言いたかったけれど、とりあえず堪えて苦笑いで済ませよう。

「まあこの調子だと何とか赤点は免れそうだしな。あと何日か面倒を見るよ」

「マジで？　おう、お前がそう言うなら信じていいんだな！？」

「馬鹿。自惚れるな。このペースで行けば、という意味だよ。今はまだ基礎の『キ』と『ソ』の間ぐらいだ」

「お、おう……」声の調子が一気にしぼんだ。

秋色に染まった風が頬を撫でる。

見上げると、夜空に月が出ていた。

本来なら家に帰っている頃合いだったが、しばらくはこのくらいの遅さになるのだろうな、と何気なく思った。

とりとめもない話をするうちに駅前に辿り着いた。一つの路線し

か通らない小さな駅だ。

「じゃあ俺はここで！」持田は手を振って言った。

「ああ、そういえば持田は電車じゃなかったね」

「悪いな、俺バス通学なんでよ」

僕はすっかりその事を忘れていた。いつもは学校から別方向のバイト先に向かう持田なので、一緒に帰るのも久しぶりだったのだ。

駅前のバス停に向かう持田と別れて、改札口を通る。

駅のホームは地方の小さな町によくある簡素なものだ。時間帯もあつて、人の数は少ない。

僕はホームの先頭で待つことにした。乗るのはいつも一両目だった。降りる駅の階段のつくりから、この位置が最も近いのだ。

二人ほどそこにいた。

一人は大学生ほどの男で、携帯電話を片手に誰かと楽しそうに話をしている。付き合いがいいのだろうな、と直感的に思った。

もう一人は僕と同じ高校の制服を着た女子。ヘッドホンで音楽を聴いている。見かけない顔だから、同じ一年の生徒ではないだろう。おそらく上級生だ。

もちろん二人とも他人同士。親しく声をかけることもなく、後からやって来た僕には見向きもしない。

「う、うつつ……」

……傍のベンチにもう一人、見落としていたらしい。女性が気持ち悪そうに口元に手を当てていた。ずいぶん酒に酔った様子だから、飲みすぎなのだろう。

どこか旅行者のような雰囲気を出していた。

2 プロローグ

（あの人大丈夫かな？）

僕の不安は電車に乗り込んだ後も消えなかった。斜め隣の座席に座り込む女性の顔は蒼白だ。明らかに飲みすぎが原因だろうけど、先ほどからずっと何かを堪えている様子から見るに、少し危険な状況にある。

先頭車両には、僕と旅行者らしき女性を除けば、二人しかいない。先ほどの上級生と大学生。どちらも女性の異変に気付いているようだった。

いたたまれなくなつた僕は席を立った。

「あの、すみません」

生気を失った女性の顔が、僕に向けられる。口を押えているため言葉は出ない。

僕は鞆からビニール袋を取った。帰りがけに持田とコンビニに行ったとき、飲み物を買っていた。これは、その時のコンビニ袋だ。僕にはあまり必要のないものだし、容量が大きい袋なのも幸いだ。

「これ、よろしければ使ってください」

こくり、とその女性は一度だけうなずいた。

僕は急いで目線を外し、少し席を離れた。後ろで気持ちの悪い光景が始まった。どろどろした液体が袋に飛び散る音の感触、久しぶりに聞いたような気がする。

（……嫌なこと思い出すなあ）

あれは中学のころだ。

昼休み後の授業、午後一時半くらいだったか、教室で横の席の生徒がぶるぶる震えていたことに気が付いて……その瞬間にはもう、

腐った酢の匂いが教室に広がっていた。あの後しばらくはラーメンを食べなかったような気がする。

あのことを思い出してしまった。忘れよう。今は窓の外を見て、夜の景色を楽しもう。

「あ、やばい……」

車内がスクリーンのように映るガラスの向こうで、隣のシートにいた上級生が立ち上がった。

振り返って、彼女の行く先を追った。どうやら女性にまた何かあったらしい。その手には同じようなコンビニ袋が握られていた。

米のとき汁のようなものが、少し床にこぼれ落ちていた。

かなりの量をもどしたのだろう。もう一つ袋が必要だったか。

「ねえ、その君」女性の背中をさすりながら、上級生は僕を見据えて「次の駅に着いたらでいいから車掌さんと呼んできてくれないかな。お願い」

「そいつは俺がやるよ」

答えたのは大学生の男だった。

「いいんですか？」

「いーって。それでも飲み会で酔った奴の介抱には慣れてるもんでね」

「じゃあ僕は床を拭いておきますね。できれば新聞紙みたいなものが欲しい所ですけど」

「……ありがとうね」

それは女性の声だった。ひどい姿になっているけれど、峠は越した雰囲気だ。

「あ……大丈夫ですか？」

「うん、あなたのおかげで、だいぶん楽になったわ」

上級生は安堵したように一息ついた。

それと同時にアナウンスが流れ、次の駅が窓の外に見えはじめた。

「お酒の飲みすぎはよくないですよ」僕は言った。

「ごめんごめん、あはは」

「笑うところじゃありませんよ」

「ここは少年の言う通り、かな」大学生の男は気さくに笑う。「まー過ぎたことは仕方がないんじゃない？　ただ、この人たちに礼くらは言うべきだと思うな」

「……お礼ねえ」

「いいですよ、別に」僕はことわった。見返りを求めてやったことじゃない。隣にいた上級生も同じ意見だった。

「またの機会つてことでいいかな？」

女性はその告げた。

「こんなんでも、昔からほら、受けた恩は返す、つてのが私の主義なんだ。あなたたち三人には、いつかまた、ね」

僕たちはお互いに顔を見合わせた。

「大丈夫かな、あの人」上級生が僕に語りかけた。「どうしてあんなになるまで飲んだんだろうね」

それは僕にもよくわからなかった。

女性は大学生と共に前の駅で降りていた。あの様子だと二日酔いは確実だ。

車内には僕たちのほかに誰もいない。黙っているのもなんとなく変なのでこの人と話を交わしていた。

「あたしはあなりたくないな。正直、吐いた物を見るのは精神的にこたえる」

「ですね。駅の職員の苦勞が少しだけわかった気がしますよ」

「たまにプラットホームでもどす人がいるよね。毎回アレを処理するなんて、あたしにはできないな」

「でもあの人を介抱したじゃないですか？」

「苦しそうな人は放っておけないもんでさ」

彼女は朗らかに笑った。

「……ところで、見たところ同じ高校の人みたいね。きみ、一年の子かな？」

僕はうなずいた。

「ヤサカヨウイチっていいます。『八』つの『坂』に、洋楽の『洋』に『一』って書きます」

「二年の若菜綾。きみからしてみれば先輩ってことになるのかな」

この日はテスト前最後の部活で、いつもより帰宅が遅くなったらしい。僕にはあまり実感のない話だった。クラブには入っていない。

「こんな時間までやって疲れませんか？」

「無駄に体力だけはあるんだ」若菜はそう言って「自慢じゃないけどさ、あたし生まれてから一回しか風邪ひいたことないのよ。ま、それだけが取り柄なんだけどね」

僕が降りる二つ前の駅で、若菜と別れを告げた。

3 プロローグ

そうして誰もいなくなった車内で、僕は深く息をつき、座席にもたれかかった。

視界の端にちらりと映る、少量の吐しゃ物。床にまだこびりついている。原因はあの酔っ払いだ。今となっては処理する気にもなれない。

(……そういえば、お礼って結局、なんだっただろう)

僕は、あの女性と面識がないはずだった。それはおそらく、若菜もあの大学生も同じだろう。

なのに、またの機会と言っていた。それがいつかは知らない。次に偶然会ったとき、という意味なのか。

いや、泥酔した人の言うことだ。本人も次の日になればすっかり忘れてのことだろう。受けた恩は返すと義理堅いことを口にしていたけれど、たかが口約束だ。それに僕も、お礼が欲しいだなんて思っていない。

首を振って、思考を打ち切った。

車内アナウンスの駅名を耳にして、僕はいつものように席を立ち上がった。

——今から思えば、きっかけはほんの些細なことだった。

酔っ払いの介抱をしたというだけの、ありふれた行為。本当に、きっかけは日常の中でもよくあることだった。当然の選択だった、と言っべきだろう。あの場にいた誰もが、当たり前前の行動をしたに過ぎない。

しかし、時としてそんな何気ない行動が、人生を変えてしまうの

だろう。僕の日々は、その時を境に新たな方向へとつながってゆく。
かつて自分自身が通った道の存在を、僕は知ってしまう。
その名前は、雨城結太といった。

4 再会1

*「再会」

九月十六日。

テストまであと一週間。基本的にこの期間において部活動は休止。下校時刻も早めだが、校舎から独立して建つ図書館など一部の場所は逆に下校時刻が延びる。

生徒会あてに届く落し物も、このころには教科書やファイル、プリント類ばかりだった。クラスの級長としてたまに生徒会室を訪れる僕の目にも、そういったものをよく目にする。

昼休みの賑わう廊下を、生徒会室へ向かう。学校から配布物を受け取らなくてはいけない。

「失礼します……あ」

生徒会室の扉を開けた僕は思わず声を出してしまった。教室内には、こちらに背を向けてパソコンの前に向かう生徒が一人。後ろに束ねた髪、少し日焼けした外見。見覚えがあった。

「若菜先輩？」

「むぐ」

振り返った上級生の頬がリスのように膨らんでいる。

傍らに購買の焼きそばパン。一袋空っぽだ。

「むお……君たしかあの時の」

「どうも」

「ちよい……待って」パンの残りを一気にほおばって「なんだ、八坂も生徒会の委員なの？」

「いえ、僕はクラスの級長としてここに」

「そっか」若菜は机の山積みになったプリントを乱雑にあさって、中から複数のプリントを僕に渡した。僕はひとまず礼を言った。

「……テスト期間における特別規則っての？ よくわからんけど。」

学校側からの通達はそれで全部」

プリントに目を向ける。細かな校則の注意書きがびっしりと印字されているが、前文に目を通す人はいないだろう。

そしておそらく、何年も使いまわしているに違いない。こんな面倒な書類を、毎年作成するようなことは誰だつてしないに決まっている。

とはいえ、これらを教室の後ろにある掲示板に貼るのが級長の役目だ。何であれ、規則には従うべきだ。

「紙の無駄だと思うけどねえ」若菜はつまらなさそうに呟いた。

「ところで、生徒会の人たちはどこに？」

「本来なら担当の子が二人いるんだけど、一人は職員室に呼び出し、もう一人は欠席でさ。でも校則として昼休みに誰かいないといけな

いから、あたしが代役をやってるの」

「面倒じゃないですか」

「もちろん報酬は戴いたよ。紙パックのコーヒーだけだ」

ふふん、と得意げに笑みを浮かべる。紙パックは机にあった……水滴が垂れて、下のプリントを濡らしていた。

ふと、僕をまじまじと見つめてる若菜の視線に気づいた。

「八坂。ちよつといいかな」

「何ですか？」

「あたし昨日の酔っ払いに会ったんだ」

ほんの刹那だけ記憶を手繰り寄せる。一日前のことを思い出すのに、それほど頭は使わなかった。

「電車の中で吐いた人？」

「そう、その人。今朝のことなんだけどね。昨日のことでお礼をしたいって」

「お礼って何でした？」僕は尋ねた。あの女性の言葉は少し引つかかっていた。それだけに、若菜の話には興味があった。

ほんのわずか、彼女はためらうような仕草を見せる。

「……あれ、なんていうか、これ説明しづらいな」

「え？」

「ねえ、君は前世ってヤツを信じる？」

唐突な質問だった。

「あの女のひと、占い師みたいだね。人の前世を占って旅をしているらしいんだ。ちょっと怪しいけどね」

「ということは、お礼って」

「そう。特別にタダで占ってもらったの」

拍子抜けした。

そりゃ期待してはいなかったけど、それ以上に肩透かしを喰らった気分だ。占い。日常生活で必要なこととは到底思えない。

「それで、前世を占った結果は」

「病弱な女の子」

言った傍から若菜は鼻で笑った。

見るからに丈夫そうなこの人には絶対に似合わない言葉だ。

「あと、そのうち前世の記憶を思い出さるうってさ。今のところ、そんな実感はないけどね」

「……あの、ひょっとして、僕のもとにも来るんですか？」

「同じ制服だったし、見つけるのにそう時間はかからないかもね」
僕はたったいま、『ありがた迷惑』という日本語を思い出した。

それでも校舎を出るのは、夜になってからだ。放課後も持田の勉強を見なければいけない。

持田の学力は軒並み平均点以下だが、特に数学が致命的だった。中間試験で学年最下位をとってしまい、今季も小テストでは壊滅的だ。まだ学年の半分とはいえど、留年の危機は十分にある。

「なあ八坂。お前ってよくこんなこと続けられるよな」

持田の声は、誰もいないラウンジに響いた。

「何が？」

「勉強」

僕は好物のカフェオレをすすった。ラウンジの自販機で買ったも

のだ。街中の自販機より値段が安いのは、学生用に設けられているからだろう。

何時間も椅子に座るのは体に悪いということ、何分か休憩を取っていた。窓の外は日が落ちていた。

「何事も集中すれば、ずっとやれるものだよ」

「すげえな」。俺には無理だ」

「持田も何かひとつくらい好きなことあるだろ。それに打ち込むのと変わらないよ」

「じゃあお前、勉強が好きなの!？」

「どうだろう」

声を荒げた持田に、僕は首をわずかに傾げた。

「ただ、学ぶことは好きだね。それは数学の問題を解くことだけじゃなくて、色々なこと」

「色々?」

「上手くは言えないかな。もう少し年齢を重ねれば、学びたいことが見えてくると思うんだけど」

「うう、お前の考えてることはよくわからん」

「親からもそう言われてるよ。でも、好きにさせてもらっさ」

自分はこれまで勉強をし続けてきた。その行いが正しいかはわからない。

けれど、自分の進む道は正しいと信じている。それだけは、胸を張って言えることだった。僕はこれまでの十五年半で、周囲の期待を裏切るようなことはしたことがない。あってもささやかな悪戯くらいだろう。ましてや犯罪に手を染めるような真似は絶対にしないつもりだった。

僕は犯罪が嫌いだ。

どんなに小さくて軽いものでも、法律で認められない行為は悪だと考えている。だから、そんなものに関わることなく、そんな人と付き合うことなく、正しい道をまっすぐ歩けばいい。

これまでも、これからも。

僕は優等生として、自分の生きる道を信じている。

5 再会2

この日の夜は少し底冷えがした。吹き付ける風に、つい最近までの熱気を感じない。

空を仰いだ。西の方向から雲が低い位置に下りている。日付が変わるころには降りださるうなと、僕は何気なく肌で感じた。

いつものように駅のホームを先頭へと歩く。

昨日はそこに酔った女性が口元を押さえていた。

今日は……見覚えのある女性が佇んでいた。

僕の姿を見て、軽く会釈する。顔立ちの整った、綺麗な女のひとだった。吐き気を堪えていた昨日からは想像もつかない。

「こんな時間まで学校に居残るのね」女性は感心そうに呟いた。「部活じゃないとしたら、夜遅くまで勉強つてところかな」

若菜の話から僕を探していることは知っていた。問題は、

「……いつからここに？」

「君の学校が終わる時間帯から、ずっと」

わずかに身構える。いいよのない気持ち悪さを覚える。そうではなくとも、ちよつと非常識だ。

「お礼なんていいですよ。気持ちはいですけど、正直そこまですてもらわなくてもいいです」

「うん？ あの人から話を聞いたのかしら」女性は意外そうな顔を向けた。

「ええ、まあ」

「そう。じゃあ話は早いわ」

女性は近くのベンチに腰掛けた。どこか遠くを見据えながら。僕と彼女との間を、何かがひんやりと吹き抜ける。

「お礼をしたかったけど、やめる」女性はため息をついた「だって、なんだか二人とも迷惑そうだったし。多分あなたもそうかって」「……」

「昨日はごめんなさいね」

本心からの言葉だと受け取った。

「これでも酒には強いほうなんだけど、昨日は一日中飲み明かしちゃってね。色々と迷惑をかけちゃったし。何かお礼をしたかったけど」

「別にいいですよ」

虚空に目を泳がせていた目を、僕に戻した。

「その代わりね」口元はにんまり笑っていた。「ちょっと協力してほしいことがあるわけなんだ」

「占いですか？」

「そう。あなたの前世を思い出させるの」

昼間の話を思い出す。前世を見てもらったと、若菜は言っていた。「本当に？」

「私には造作もないことよ」

近くの警報がけたたましく鳴り響いた。

しばらくたって、アナウンスから、前の駅で車両故障が起きたことを知った。駅に来るまで時間がかかるだろうと。

「なんだか怪しいな」

「どう判断するかは、あなたに任せるわ」

「そもそも前世なんて概念、存在するのかどうかわからないのに」

「前世は存在しないと考えるのも自由。まだ誰も証明できていない現象だから、信じないのも当然と思うわ」

「それじゃ、あなたはなんですか」

「前世は存在する」相好を崩した。「命は巡る。死んでいった後、人はその記憶を持って生まれ変わる……ある宗教ではそれを、輪廻転生と呼ぶわ」

——輪廻と転生。

環の中で、命はとどまることなく、どこかにつながる——

「ただ、殆どの人は前世の記憶を思い出さないまま、人生を全うするの」女性はそう説明して「広い世界の中で、前の自分を知る機会なんて奇跡的な確率だからね。それこそ海の中の小石を探すのと同じ……だから、忘れたままの前世の記憶を思い出させるには、それなりの能力を持った占い師の力が必要なのよ」

「占い師？」

「旅をしながら生計を立てるには、占い師という肩書きだと都合が いいの。もっとも、一人前になるには修行を積まないといけない だけだね」

僕はふと気づいた。

「それじゃあ、お礼をしたいっていうのは」

「そう。本当は自分の修行のため」薄く笑う。

「……やっぱり、自分のためか」

「はい、そうとわかつたら目を閉じて！ 電車が来る前に始めるよ」

僕はしぶしぶベンチに腰を下ろした。

「目を閉じて」

そこに、静かに語りかける。

「まず頭の中を空にするわ。余計な雑念が生まれるだろうけど、それを追わないこと。考えることは捨てて……」

言われるままにひとおりの動作を行う。

まるで座禅をするかのようにだった。

「……思考の波を収めて」

僕はその言葉に従った。額に手が当たるのも、気に掛けないように努める。

「……凪いだ湖の底が透けて見えるように、ただ無心でいるの」
イメージを心の中に植え付ける。周囲の物音も、光も、遮断して
いく。

旅人が何かを呟いたが、その言葉の意味を考えない。

どれくらいの時間が経っただろう。

いつまでかかるだろうか？

はやる気持ちを抑える。

芽生えた疑問を消す。

静かに時を送る。

ばちん、と。

何かの切れる音が脳裏にこだました。

「もういいよ」

その言葉に、僕はうつすらと目を開ける。

「……何も変わってないような？」

「しばらくはね。でもそのうちあなたは思い出すわ」

そう言って隣のベンチに腰を下ろす。

「前世の記憶を？」

「あなたが生まれる前の、はるか昔の記憶をね」

電車が目の前に寄って、その扉を開ける。

僕はおもむろに鞆を持って席を立った。

「私がしたのは、あくまで扉の鍵を開けただけ」言葉を紡ぐ「開いた扉の中を見るかは、あなた次第。少し間を置いたら、思い出してみなさいな」

「……わかりました」

「またね」

旅人はそう言って、僕を見送った。発車と共に景色が後ろに流れ、やがてその姿は暗闇の中に消えていった。

6 再会3

…… 本当に前世が存在するのか、僕にはわからない。

あの旅人の言うことを信じてみようと思うけど、もともと非科学的な根拠のないモノは信じないのが僕の性格というものだ。それでも、ちよつとだけ期待はしていた。

だって、自分の前世を知れるというなら、誰だって好奇心は湧くだろう？

すべての記憶を一気に思い出すわけではない、とあの旅人は言った。

泥水に満たされた水槽だと思えばいい。まだ栓を抜いただけの状態で、濁った泥水が引いてゆくにつれ、徐々に水槽の底が見えてくる。人の一生分の記憶だと思えば、膨大な量だ。ひとことに前世の記憶と言っても、思い出すのに時間はかかるだろう。

あと、記憶にも序列はあるらしい。すぐに思い出せる新しい記憶もあれば、あやふやな昔の記憶もある。誰でも物心つく前の記憶は、ほとんど思い出せないだろう。

(……でも、もう一週間だ)

カレンダーの日付を見た。九月二十三日。『そのうち』というには、語弊がある。長い時間が過ぎた。

前世の記憶を思い出すことは、なかった。

(これはちよつと、からかわれたかな)

「八坂、この問題が解けたぜ」

僕は我に返った。図書室の机に向かい合う持田が自信満々にノートを突きつける。

「どれどれ……うん、答えは合ってるよ。でも、この解き方じゃ計

算が複雑すぎるよ。テストで同じ問題が出たらどこかで計算ミスする危険があるな」

「えー！ だって俺その解き方しか思いつかなかったし」

「定理を使えば、このタイプの問題はあえて式を展開しなくても楽に求まるんだ。まあ、教科書じゃ扱われてない定理だから、知らないのも無理はないかな」

「こいつを丸暗記すりゃいいんだな！」

「暗記は禁物だって初日に言っただろ。今はそれでよくても、忘れたらそれまでだ。学年末試験で大変なことになる」

「う……じゃあ八坂が教えてくれよー」

「問題集に説明があるから自分で読みなよ」

うめき声をあげる持田をよそに、僕は立ち上がった。

「どこへ行くんだー？」

「参考書を取りに、ちよつとね」

そう言い残して室内を所狭しと占める本棚の迷路に入る。県内でも有数の規模を誇る図書室だけあって、蔵書量はかなりのものだ。参考書一つ探すだけで苦労がかかるのは難点だけれど。

スペースのあちこちに生徒を見かける。しゃがみこんで本の内容をメモに取る人。何冊も抱えて机に戻っていく人。静寂な室内に、急ぎ立てるような空気が張りつめている。

（……もうテスト前日か）

僕は小さく息を吐いた。いいようなない疲労を感じていたからだ。持田の手伝いに気を取られて、最後まで自分のテスト勉強は思うように進まなかった。それで少し苛立っているのかもしれない。

（結局、あの旅人の言っていたことも嘘だったんだなあ）

苛立ちついでに、僕は先週のことを思い出す。前世があると言っておきながら、何も思い出さない。いや、そもそも前世なんて存在しないのだから、思い出す記憶なんてないのだ。そうに決まってる。もはや、そんなのは考えるだけ時間の無駄だ。

（占いペテン師と言ってやりたい気分だ、まったく。あんな詐欺師

に金を払う人がいるだなんて、気が知れないよ）

心の中で鼻であしらっても、やることは変わらない。

今は、テストのことだけを考えるのが正しい選択というものだ。

余計なものは無視して、通り過ぎればいいのだから――

「八坂？」

外からの声。放ったのは持田だ。立ちすくむ僕を不思議な面持ちで見据えている。

「こんなところでどうした？」

「いや……参考書が中々見つからなくて」

「それよりさ、テスト範囲の問題全部解き終わってたんだ。ちょっと見てくれねえかな」

「ん、ああ。わかった」

僕は頷いて、持田の後に続く。

棚の間を抜ける前に、もう一度振り返った。

（……幻聴？）

持田に呼ばれる直前に、声がしたのだ。

（……俺は、道を誤った……か）

その声は、耳の奥で。

その言葉は、脳裏に響いた。

僕は何度か首を振って、考えを閉じた。

いつもより早く校舎を出たせいか、まだ空を覆う色は明るい。持田のテスト勉強がひととおり終わったからだ。

「あと、テストでは解ける問題から解くことだ。僕から言えることは以上！」

「おっけー」

間の抜けた持田の声が返った。

「……大丈夫かい？」

「おうよ！　だってテスト範囲全部に目を通したんだぜ？　問題も全部解いたし。テストで八十はかてえかもな」

「五十五くらいが限界だ」

「なんで！」

「君が解いたのはあくまで公式や定理に沿った基本問題だ。テスト問題の比率から考えて、全部解いたとして五十点。まあそのうちの八割はいけるだろう。応用問題に関しては十点いけばいいほうだよ。当初から想定していたことを口に出す。

「僕が指定していない問題があっただろう。そこからもおそらくテストに出るだろうね」

「ちょ、ちよつと待てよ！　どうしてそれを教えてくれなかったんだよ？」

「まず一つ、基礎問題を解けないと絶対に攻略できない問題だから、基礎を重点的に固めることにした。そしてもう一つは、時間的な制約から。その証拠に、基礎問題をこなしただけで精一杯だっただろ」「う……そ、そりゃそうだけどよ。俺もつと点取らないとやばくなるんだって」

「そういえば、中間試験で何点だったんだ？」

「八点」

「……へ？」

僕は石のように固まった。

口を半開きに、呆然と。

「ど、どうしたよ」

「大丈夫。基礎はこなしただから、初見でも対応できるさ」

「お、お、おい、信じていいのかよ。まさかお前、俺が中間試験で八点だったことを忘れてたんじゃ」

「忘れてなんかいないさ。せいぜい二十点くらいかと思って対策を練ったわけじゃないから、安心しなよ。それじゃあな！」

僕は早足で駅の改札口をぐぐり抜けた。全身に嫌な汗を流しながら。

持田から逃げるように階段を駆け上がる。近くにいた男が何事かと振り返るのも気にしない。

「……まいったな」

ホームで息を切らしながら、僕は壁にもたれかかった。想定が甘かった。最初にあいつの点数を聞いておくべきだった。八点なんて聞いてないよ。

学年ブービーで二十三点。それも確か僕のクラスだったはずだ。

他のクラスよりも数学の平均点が異様に低かった理由にいまさら気づいた僕は、級長としてとても身につまされる。

（……うう、頭が痛い）

壁に頭をつけてうなだれていると、どこからか聞き覚えのある声があった。

7 再会4

駅のホームを左右に見渡した。この場にはいない人の声だと判断し、僕はホームの外に目を向ける。線路の両側に位置するホームは、仕切りを隔てて外の道路に接している。外に見える箇所に移動して、僕はフェンス越しに探す。

「……あれは」

声の主は若菜だった。駅前の片隅で、男と談笑している。あの迷惑な旅人が嘔吐したとき車内にいた、大学生風の男だ。

楽しそうに話をしている。知り合いだったのかと思いかけて、僕はふと疑問が浮かんた。違う。あの時は二人とも、お互いに他人同士だったはずだ。僕も含めて、三人は見知らぬ人だった。

（……いや、僕が気にすることでもないか）

のぞき見はやめよう、とばかりに目を離す。そうしていつものようにホームの先頭に向かう。先頭車両に乗れば、降りる駅の出口にいちばん近いから。

「あの占い師、本物だったよね。すげーよな」

ぴたりと足を止める。

僕は今、怪訝な表情をしていることだろう。もう一度フェンスに寄った。二人の話が妙に気になって仕方がない。

心のどこかに、そんなことあるはずがないと決めつけていた。

話の内容から、おそらく僕の知る占い師もどきの旅人だと理解した。旅人の話から、すでにあの二人の前世を占ったことは聞いている。問題はそこからだ。何が、『本物』だなのか。

『徐々に、思い出していく』

そんな旅人の言葉が頭に浮かぶ。

逆にいえば、それは思い出そうとしなければ始まらないのではないか。

僕は最初からあの旅人に半信半疑だった。疑ってかかっていた。その思い込みと、テスト対策に忙殺されていたことと。二つがうまく重なって、たまたま『そのこと』を考えていなかったのだとすれば。

子供のころの記憶を思い出すのと、同じように……

突然、発車の合図が耳に入る。

電車が来ていたことに気づき、僕は急いで踵を返した。

駆け込むと同時に扉が閉まる。ゆっくりと、足場が揺れる。窓の外景色が動き始めて、あの二人の姿はすぐに見えなくなった。

僕はしばらく、流れる景色を見つめていた。

……思い出すだけで、よかったというのか。

それならば、あの人を嘲るのは間違っている。誤解していたのは、僕のほうなのだから。

正直、前世なんて存在しないと決めつけていた。それは言い換えれば、偏見だ。もっと、柔軟に考えよう。

なんだってそうだ。あるかもしれないという可能性。それを、最初から偏見で否定しては、何も進まない。

でも、信じるのは一度だけだ。僕は理屈のないことは鵜呑みにしない。

ただ可能性を試していないから、それまではオカルトじみた考えでも信じてみよう。

先頭車両に乗客は少ない。ほどよく空いた車内で、腰かける座席はいくらでもあった。

えんじ色のシートに背を預け、僕は目を閉じた。

考えれば、生前の記憶だ。十六年以上前も昔のこと。今までずっと眠っていた記憶を、すぐ思い出せるわけがなかったのだ。

ある限りの記憶を、昔へと辿る。

中学生の記憶から、時間をさかのぼる。幼稚園となるとほとんど忘れている。物心がついた、最初の記憶に行き着く。父親の投げたサッカーボールが顔面に当たって、痛くて泣いていた。その先は、何も覚えていない。

その、さらに先。

生前の、記憶。

僕は何者だった？

何処で暮らしていた？

いったいどんな人生を送っていた？

旅人のいう言葉を、信じてみよう。僕は、すべてを知っているはずだ。今まで僕の持っていた記憶のほかに、見慣れない思い出が存在するなら、きっとそれが、前世の記憶だ。

僕は――

――自分の手に、冷たい感触が当たった。

僕は目を見開こうとして、景色がぼんやりしていることに気付いた。

水の滴った手が震えていた。

僕は、泣いていた。

「あ、れ？」

まぶたを触る。手のひらが濡れた。

心臓が波打つ。頭が疼く。まばたきをいくらしても、抑えていた手に暖かなものが流れてくる。

涙が、止まらない――

――俺は、いつから道を誤った？

――どうしてこんなことをした？

――俺は、馬鹿だ。

――何もかも、俺の手で壊してしまった。

――この手で、環を。

「あ……うあ……」

思い、出した。

思い出して、しまった。

僕は両手で頭を抱えた。

力の限り掻き糞った。

そうして獣のように咆哮した。心を涸らすまで、叫び続けた。

8 再会5

どれくらいの時が、経っただろうか。

いつのまにか僕は、自分の部屋の扉にもたれてうずくまっていた。部屋の中に明かりはない。カーテンも閉め切っている。外は真っ暗だ。

どうやって家に帰ったのだろう。何も覚えていない。その直前に車内で座っていたはずだ。

奇声を上げて、それっきり。

たぶん、あの場にいた人はびっくりしただろうな。

……思い出さなければ、僕はどれほど幸せだっただろう。

認めない。

認めたくない。

あれが自分だと認めてしまえば、その瞬間、僕は吞まれてしまう。

「……顔、洗ってこよう」

手について立ち上がろうとする。足が震える。無理矢理に力を込めるけれど、バランスが崩れてドアに当たった。

扉の外は廊下だ。薄暗く、足元もおぼつかない。ガラス窓の向こうに深い闇がのぞく。

階段を下りて一階へ。突き当りに洗面所はある。風呂場につながる小さな個室だ。

家には誰もいない。

「……そういえば、出張だったっけ」

幸いだ。それでも余計な心配はかけたくない。

蛇口から流れる水は冷たい。けれどその冷たさが、今は心地よかった。

その冷たさは、僕と世界をつなぎとめていた。実感を与えてくれる。

生きているのだと。

だから、ほんの少しだけ、心が安らぐ。

部屋の時計は一時を回っていた。頭を働かせて、ようやく真夜中の一時だと悟る。

僕は眠ろうとしなかった。

ずっと意識を保っていたれば、思い出すことはないのだから。夢を見るのが怖かった。

今はまぶたの裏の闇さえおぞましい。

時計の針の刻む音が、僕を支えてくれる。

また、目の奥が熱く疼いた。

涙は、涸れ果てていた。

外に人の声がするのを聞いて、ゆつくりと窓を見やった。

朝はカーテンをすり抜けて僕のもとに現れた。期末試験の日だ。

最初の科目は数学。持田の勉強を手伝ったおかげでテスト対策は十分だし、万全の準備で臨めないだろう。珍しく今回は不安だった。しっかりしなきゃ。

支度を整えて、いつものように登校しよう。遅刻なんてもってのほかだ。

世界が揺らいで見えた。

毎日通いなれた道を進み、見慣れた駅に入って、提起を改札に通し、混み合ったホームに出る。

電車が来るのを待って車内に乗り込む。手すりにつかまりながら何駅目かで降りる。さらに歩いて高校に辿り着く。

同じ習慣に身をゆだねて。

何も考えない。

周囲の喧騒が、僕を突き上げる。

教室で何人かの知り合いに声をかけられた。いつものように僕は挨拶した。

最前列の自分の席に座った。隣から持田が話しかけてきた。なんだか顔色悪いぜって、聞こえたような気がした。

机に教科書を広げた。中身が頭に入ってこなかった。そのうちに担任が現れて、大きな問題用紙を教卓に置いた。

教室に日直の号令が轟く。担任からテストの説明を聞いた。用紙が配られ、教室内がしんと静まり返った。

チャイムが鳴った。一斉に紙をめくる音。ペンが机の上に走る音。僕は着実に問題を解いていった。思った通り、前半は基礎問題だ。難なくこなして、応用問題に取り掛かる。これも理解している。手順をたがわず、式とグラフを書きこんでゆく。

何も考えたくなかった。

このままずっと、走り続けたかった。

一度でも、止まりたくなかった。

残り一問となつて、解答用紙もほぼ埋まった。時間もまだ半分。計算ミスも一つ一つ確認済みだ。どうやらテスト前の不安は杞憂に終わったようだ。

そこで手が止まった。

この問題を解き終えたら、僕は何をすればいいのだろう？
ずっと、待つしかない。

何もしないで。

何かしていないと、走り続けないと、いけないのに。

止まりたくない。

待ってなんていたくない。

でないと、思い出してしまう。忘れようとしていた、悪夢を。

「……………環」

衝撃が頭を揺らし、視界は暗転した。

9 再会6

最初に感じたのは薬品の匂い。捉えたのはもちろん嗅覚だ。次に聴覚。人の話し声。近くに複数の人間がいると推察する。

触覚は何か軽いものに挟まれていると伝えてくる。味覚はわずかな鉄の味を。あとは……視覚だ。

目を開けると、真っ白な天井。

電気がついていないのに、眩しささえ感じる。

「お、起きたようだな」

誰の声だろうか。

頭を巡らせる。

「持田？」僕は声を出した。喉が渴いているせいか、うまく言葉が出ない。

「よしよし、生存確認」

「おい、持田」横から担任の声が飛んだ。持田はおずおずと引き下がる。

ゆっくりと身を起こし、辺りをうかがった。僕は新調のベッドに寝ていたらしい。そしてこの場所には見覚えがあった。保健室。しかもまだ陽は高い。開いた窓に、柔らかな秋風がなだれ込む。

「……俺、どうして」

一旦言葉を止めた。

『あいつ』じゃない。

「先生、それと持田。僕はいつたい、どうしてこんなところで寝ていたんですか？」

「覚えてねえのかよー。お前、試験中に気を失って倒れたんだぜ」

持田の発言に僕は目を見開いた。同時に左の頬が鈍い痛みを訴える。机の角にぶつけてしまったのだらう。なんとなく、その直前の

記憶を取り戻した。

家を出た時から既に失調しかかっていた。それを何とか堪えていたのに、あの悪夢のような記憶がフラッシュバックして――。

いや、それよりも、

「あの、今日のテストは！？ まだ国語もあつたのに……」

「この日の試験はもう終わった」担任の野太い声が頭に響く。「だが、君の場合は止むをえない理由での事だ。ほかの先生方と話をし、特例として国語の試験を別途に行うと決めた。数学はほとんど解いていたからそのまま採点させてもらうがな」

「まあ何にしても大したことなくてよかったぜ」

「……」

「明後日まで試験はあることだし、もしまだ体調が優れないのなら、特別に延期することも考えるが」

「いえ、もう大丈夫です」

「そうか。よかった」

言つて、パイプ椅子から腰をあげる。

「今は出ているが、保健室の先生にも話をつけている。だが試験日の下校時刻は昼までだ。二人とも、なるべく早く下校するようにな」

「はい、わかりました」

「へーい」

扉が勢いよく閉まり、硬質の足音が遠ざかってゆく。ふ、と室内の空気が和らいだ気がした。

「あいつ、冷てーよなあ」不意に持田が言った「八坂が倒れたつづきのに、試験日程の話ばかりかよ」

「別に気にしてないよ。一人だけ日程をずらすだけでも大変なんだし」

「俺には、お前の成績だけを気にしてるようにしか見えないけどな」

「……中にはそういう考えの人もいるかもしれないけど。でも一概にそれが悪いとは言えないよ」

「甘えよなー、お前って」

持田は肩をすくめた。

「まあおれも人のこと言えねーけど」

「なんで？」

「倒れたのってたぶん、俺のせいじゃないかな。テスト勉強を無理やり教えてもらったせいで、お前に余計な苦勞をかけちゃったし……」

「いいや、倒れたのは僕の責任だ。正直、昨日から寝ていなかったし、体がもたなかったんだろうね」

そう、持田は何の関係もない。何も、悪くない。

「あ、そうそう。それより持田。数学の試験はどうだった？」

「おう、ばっちりだぜ」持田は不敵な笑みを見せた。

「本当かい？」

「おいおい今までの俺とはちょっと違うぜ？ お前驚くなよー」

「わかったから問題用紙を見せてくれないか。そこにも答えは書き残しているだろう」

自信たつぷりに渡される。今日配られたばかりなのに、なぜか問題用紙は汚れていた。加えて判読不能の書き殴り。僕は目が痛くなった。

「……おい、基本問題を一つ答えるのに何で三ページも式を要するんだ？」

持田が帰った後も僕はしばらく寝転がっていた。本当はもう大丈夫だけど、一人でいたい。しばらく放っておいてほしいというのが本音だ。

「……僕は、何者なんだ？」

異物のような記憶が突然僕の中に現れて、しかもそれは僕自身だ。僕は確かに記憶を取り戻した。けれど、僕はそれを拒絶したい。

ソレが自分であることを、認めたくない。

両手が震える。シーツを握りしめると、汗がじんわりと広がった。体が恐怖を覚えているのだ。

まぎれもない、『僕』の記憶だと示すように。

——俺が、弱いから——

心臓の音が耳に伝わる。

血管が脈打つ。

呼吸が荒い。

頭で否定しても、行ったことへの実感は消えない。

「……っ！」

壁を殴りつけた。

拳に響く激痛に、動悸はぴたりと収まった。

痛みは別の痛みで打ち消すのが早い。

うつむいていた顔を上げた。

足音がこちらに近づいてくる。

保健室の先生かと思ったが、そうではなかった。扉を開けた人物を見た僕は思わず声を上げた。

「先輩、どうしてここに」

「先輩が八坂と同じクラスにいてね。その子から話を聞いたよ」

この学校で僕が知る上級生は、ただ一人。

「っていうか、若菜さんでいいよ。部の先輩はしょうがないとして、年下の子にそう言われるのはあまり好きじゃないから」

「あ、……はい」僕は承諾の意味で首を振った。試験中に倒れたことが、学校中に広がっているのだろう。少し気恥ずかしくもあった。若菜は日直の仕事で学校に居残っていたらしい。何でも、職員室まで日誌を取りに行く途中でその後輩に出くわしたとか。

「そいつがあたしの知るヤツだと聞いて、一応様子を見に来たんだけど……具合、どう？」

「この通りもう大丈夫です」僕は気丈に振る舞った。「倒れたのも、実は昨日寝てなかったからなので」

「そう。でも、無理はするんじゃないよ。勉強はできても、それで体を壊したら何にもならないんだからね」

「すみません」

「謝らなくていいのに」含み笑いを浮かべて「ま、元気そうならなによりだ。あたしもそろそろ帰らないと担任に怒鳴られるし。さて、退散しますか」

それじゃあ、と言い残して、若菜は開けっ放しの出口に視線を向けた。

肩にカバンをかけ直しくりと反転する。その後姿を僕は見ていた。

心の中で、ふと昨日のことが鮮明に蘇った。

大学生の男との、占い師の話。

(……そういえば、若菜さんも)

更に記憶を巻き戻す。一週間前、僕が生徒会室で鉢合わせた時だ。この人は既に、旅人と会っていた。そして、前世を占ってもらったはずだ。

あの時は何も思い出していないと言っただけで、今はどうだろう？

この人も、前世の自分を知った？
僕のように？

「若菜さん！」

僕は声を張り上げた。

もちろん、室内には二人しかいない。若菜は振り返った。

「ん。なに？」

「あの……」呼んだそばから言い淀む。次の言葉が出てこない。こんな突拍子もない話を、いきなり持ち出していいものか、迷ってしまっ。

若菜は多少面食らったように首をかしげていた。

「倒れたのには理由があるんです」

「理由？」

「少し、話を聞いてもらえませんか？」

「うん。いいよ」表情を察したのか、若菜の口調は穏やかなものになる。

ついさっき持田の使っていたパイプ椅子に、彼女は腰を下ろした。き、という音が静まり返った保健室に溶け込む。

「話つてのは、何かな」

「その……こんなこと、他の人に言えないんですけど……」
間を置いて、僕は意を決した。

——僕は、前世の記憶を取り戻した。

けれどもその記憶はあまりに悲しくて、許しがたいもので。どうしていいかわからなくなつて、眠ることさえできなかった。

この苦しみは、誰にも語れない。当然だ。こんな事、誰が信じる？ テスト勉強からくる心労だと片づけられるのがせいぜいだ。でもこの人なら……そんな僕の話をも、聞いてくれるかもしれない。

前世の存在を、知っているのなら。

僕の、そんなまとまらない話を、若菜はじつと聞きつづける。
その眼差しは、頭のおかしい人に向けるものではなかった。
ただまっすぐに、僕を見据えていた――

「なるほど。そうだったのね」話を終えると、若菜はゆっくりとう
なずき返した。「……君の前世がどんな人なのか、あたしは知らな
い。でも、それがすごくつらいものだってことは、わかる。そのこ
とで八坂が苦しんでいることも」

「嘘じゃ、ないですよ……？」

「うん。知ってるよ」

怯えながらの問いかけに、若菜はなだめるように答える。

「だって、あたしも取り戻したから」

「え……？」

「前世の記憶」軽く告げた。「あの占い師に見てもらったあと、一
日くらい経って、うつすらと思い出してきたの。あの頃の日々をね。
だから八坂の言うことも、八坂の気持ちも理解できる。あたしも同
じように、つらかったから」

生徒会室で若菜が何気なく言っていたこと。

前世は確か……。

「最初に思い出したのは、死ぬ間際の記憶だったわ」

11 再会8

「まるでね、ついさっき起きたことのようにだった。突然胸が締め付けられて、大量の血を吐いて床に倒れた時のことをね。そのとき周りにいた人の表情もはつきりと思い出せる。近くにあったぬいぐるみも、ベッドから落とした本も、何もかも」

若菜は視線をわずかに傾けて、しかし淡々と、死を語る。それは、経験したものにしか分かり得ない痛みであり、絶望だ。

「意識が遠くなって、最後に何も見えなくなつた……思い出した時は大変だったわ。それまでなんともなかったのに、いきなり息が苦しくなつたの。体が死を訴えてきた。でもそれは錯覚でしかないわけだし、すぐに収まつただけだね。さすがに怖かつたよ」

僕が何も答えなかつたので、わずかな沈黙が間を埋めた。

「考えてみれば、『それ』を最初に思い出さないわけがなかったのかもね」遠くを見つめたまま「前世の記憶のうち、いちばん新しく、痛みを伴うもの。覚えていないわけがないよね」

口にもものが詰まつたように、言葉が出ない。

「八坂の話を聞いて、何となくそうじゃないかなって思つただけで、違つたかな？」

「……若菜さんは、平気なんですか？」

喉からうまく出ない声を、ようやく振り絞るように言った。

「僕は怖かつたです。あんなの、今でも思い出したくないくらいです。いや、思い出さなきゃよかった……」

すべてはあの旅人が余計なことをしたから。

あの人にかかわらなければ、こんな思いをしなくてよかった。

きつと今頃、持田と昼飯を食べながら、のんきにテストの答え合わせをしていたに違いない。

「あたしも、怖いよ」若菜は言った。「でも、それ以上に楽しかった日々のことを思い出すの。あの頃の自分は思うように体を動かせ

なかったけど、いろんな人が家に来てくれた。その人たちと会って話をするだけで、あたしは楽しかった。辛い記憶も多かったけど、同じくらい幸せだった記憶も覚えてたわ」

「それって、現実だったんでしょか」

「ええ」

ぶしつけな質問だと、言った瞬間に悔やんだ。若菜は特に気にしていない様子だった。

「……夢じゃない、ですよ」

「今生きている自分と同じ世界での出来事。きっと、八坂も」

「……僕も？」

「参考に、ならなかったかな？」

そんなことはない、と口にしようにしても、身振りで示すだけで精いっぱいだった。それでも若菜に伝わったのか、またもとの明るい表情を僕に見せた。

「気に病む必要はないと思うよ」そうして、言った。「前世はあくまで前世。今の自分とは違うんだから」

「そう、ですよ」

昔がどうであれ、大切なのは、過去に縛られないこと。

今、この瞬間を全うすること。

テストは次の日も控えている。だからそれに向けて、少しでも授業ノートを見直さなくてはいけない。ノートを取っていないのなら友達に頼んで見せてもらおう。

テストが終わったら、しばらく休みだ。僕だっただまには遊びたい。

休みが終わったら、またいつもの日々が始まる……。

僕には、やることがあるんだ。

なのに、どうしてだろう。

いつも通りの道を歩めばいいはずなのに。

心のどこかで、それを許さない自分が生まれている。

罪を償えと、僕に迫る。

それを捨てて、安穩と暮らすことは――

――環に対する裏切りだ。

「八坂」

声とともに、僕を呼んだ相手は何かを突き出した。ストラップのたくさんついた携帯電話だった。

どういうことか伺った。

「携帯電話、持っていないの？」

「そういうわけじゃないんですけど……」

携帯の所持自体は校則で認められている。だから僕も、連絡用にひとつ持っていた。

「連絡先を交換しよ」若菜はあっさりと告げた。「まだ気持ちの整理がついてないみたいだし。辛い時はあたしに言ってきなよ。紙パツクのコーヒー一つで相談に乗ってあげるから」

「え、でも」

「それとも、そのままずっと一人で抱え込む気？」

遠慮する僕に、若菜はつまらなそうに見やる。

「……あたしにはこれくらいのことしかできないけど。つらい記憶を思い出して、誰にも話せないってよりましだと思うの。ほかの人に前世の話なんてできないもんね。それに、話すことで、気が楽になることもあるかもしれないし」

「どうして……僕にそこまで」

「だって、苦しんでいる人を見過ごすことはできないからさ」

にやりと笑みを浮かべる若菜につられて、思わず僕も口元が緩んだ。

本当にいい人だ。おそらく部でも後輩に慕われているに違いない。そう言ってくれるだけで、有り難いのだから。

……僕はその時思い出した。

『あまきゆうた雨城結太』と名乗っていた頃の自分にも、同じような人がいたことを。

また一人きりになった僕は、ベッドの上で考えを巡らせていた。若菜に悩みを打ち明けたこともあつて、少し気持ちに余裕ができていた。もちろん話していないこともある。誰にも語れない過去も存在するし、いくら親しい人でも話せないことだってある。

そういうのは、やはり自分が一人で向き合わなくちゃいけない。僕はベッドから降りて、自分の上履きを探した。

久しぶりの地面の感覚を、靴下でかみしめながら。

12 閑話

雨城結太。

十六年前まで存在していた男の名前であり、僕の前世にあたる人間だ。かつての自分、と表現した方がいいかもしれない。とある不思議な旅人と出会ったことで、彼の記憶は僕の中によみがえった。

「ふむふむ……五年前に、悲願だった球団初のリーグ優勝か。あの当時は弱小チームだったのに変わったなあ」

部屋のパソコンと向かい合う。去年の誕生日に買ってもらったパソコンはまだ真新しさを感じた。それは両手で弾き続けるキーボードも同様であった。

僕はこの日、試験休みを使ってちよつとした調べものをしていて、何のことはない、取り戻した前世の記憶の『更新』だ。今の視点から、かつての時代を振り返り、世間の流れを眺めていた。

「へえ、あの野球選手、ずっと前に引退してたんだ。そういえば何年前かにニユースでやってたっけ……前に生きていた時はまだ新人だったのに」

時代の流れを感じる。元々世間の流れに疎い僕は、まるで浦島太郎の気分だった。雨城結太の知識は、十六年前で止まっているから、なおさら新鮮なのだ。

（やっぱり、同じ世界だ）

現代の知識を仕入れるうちに、僕はそんな確信を抱いた。

前世と今の僕が、同じ世界にあるという確信。その事実を知れただけでも、感慨深いものがあつた。以前の自分とのつながりが、同

じ空の下にあるということなのだから。

十六年前まで会っていた人たちに、かつて住んでいた町。十六年経った今、どう変わっているのだろう。僕にはわからないことだし、それはこの目で見ないといけない。こうして自分の部屋でパソコンと向かうだけでは、実感が湧かないことだ。

(……でも、僕にその権利はない)

彼らに顔を合わせる資格はない。雨城の犯した罪はそれほどに、重い。

雨城は……僕は、ある事件の当事者だった。

十六年前の冬の終わりに起きた殺人事件。あの時の僕を決定的に狂わせた、忌まわしき記憶。

どれだけ悲しませたことか。

どれほど迷惑をかけたことだろう。

それは、永遠に許されることではないのだ。

(……これは、事件の概要か。何年も前のことなのに、よく記録に残してあるな)

僕は身を乗り出して、画面を食い入るように見つめた。

一言一句逃さず、文章を読み上げた。

——三月十五日、山中で身元不明の自殺体が発見される。遺体は損傷が激しいものの、指紋や歯型などから付近の市内に住む男性・雨城結太と判明する。遺書などとは見つかっていない。

——三月十八日、二月下旬に起きた殺人事件の容疑者を雨城結太と断定。被疑者死亡として書類送検する。

僕はパソコンを閉じて、外の空気を吸いに出かけた。

13 記憶1

*「記憶」

例えるなら、更新。

それまで『八坂洋一』だった自分に書きされる『雨城結太』という自分。今の僕は八坂を名乗るものであり、また、雨城の記憶と心を受け継ぐ人間でもある。二つの人格が、僕という一つの器の中で、歪にまざり合っているのだ。

前世の記憶を取り戻した——言うのは簡単だ。けれどそれが、今の自分と相容れない人間だったなら、それまで築いてきた自分はどうなってしまうのだろうか。

犯罪を嫌う自分の前世が、犯罪者だったとすれば？

これほど皮肉なこともない。価値観、性格……今の自分とはあまりにかけ離れた過去の自分。僕はこの矛盾する自己を受け入れなくてはならないのだ。

だから、前世で犯した罪から逃れることはできない。それは雨城結太が僕の中に蘇った時から、背負う運命にあった。

(……八坂洋一と雨城結太。僕は、一体どちらなんだろう?)

高台の上から自分の暮らす町並みを見つめながら、僕は思索する。十月初日、試験休みの昼。十六年前と変わらない世界がここにある。流れる風のおい、空にかかる雲、全て以前の世界となんら変わらない。

記憶を取り戻して、一週間が経った。

確かに雨城結太は蘇った。しかし僕は元の八坂洋一であり続けた

し、迎え入れる周囲の環境もこれまでと変わらない。一人の高校生として、他愛のない日常を過ごしていた。

だが……何かが違う。

ほんの小さな異物が、それまでかみ合ってきた歯車を徐々に狂わせるように、僕の中で何かが変わっていく。八坂としての自分と、雨城としての自分。同一の二人は、決して相容れない。

歯車が壊れるか、異物を砕いてまた元の動きに戻るのか。

行き着く先は、どちらか一つ。

僕は首を横に振った。考えることがありすぎて、何をすべきか途方に暮れている。

高台から町に下り、通りを歩く。特に行くあてもなかったので、町の境にある川まで行き着いてしまった。

大きな橋がまたいでいた。町は下流にあつて、川幅が広くなっている。

堤防の上に腰かけて、僕は何の気なしに向こうの町を眺めていた。近くのグラウンドで野球の試合をしているらしく、掛け声がしきりに耳に伝わる。

(……確かこの方角だな)

この橋を渡つて、まっすぐ行けば、いずれ前世の自分が住んでいた町に行けるかもしれない。

ただしその町は一つの地方を越えるほどに遠い。大きな電車を二回ほど乗り継いで、ようやく辿り着ける距離だ。あいにく小遣いで生活する高校生に、そんな金はないだろう。

いや、それは雨城結太のころの話だ。僕は普段から浪費しないで貯金している。それを切り崩せばなんてことはないだろう。

(物理的には可能ということか)

僕は土ぼこりを払い、堤防を下りる。

家に帰ってひと眠りしようか、雑草を踏み抜けながら何気なく考えていた。

背後に、自転車の動く音。

「おーっす」

ペダルをこぎながら持田が現れた。

「元気ねえな。こんなところで何たそがれてんだ？」

「……考え事をしていてね」

「テストが終わったつてのに、まだそれかよ」言いながら彼は自転車のベルを鳴らし始めた。「お前最近暗いぞ。なんか悩み事でもあるのかよ。テストの成績か？ お前は別に心配しなくてもいいと思うぜ」

「え、別にそんなことで心配してないけど」

「うっぜー」

今度は高速でベルを鳴らす。何か変なこと言ったかなと首をかしげる。

「お前、今、暇か？」持田が言った。「折角だから飯食いに行こうぜ」

「そうだね。ちょうど頃合いだし」

家には連絡を入れておこうと携帯を開く。

ボタンを押す前に、ふと僕は顔を上げた。

「ところでさ、なんで自転車なんて持ってきたの？」

「隣のCDショップに用があつてな。ちよつと」

「わざわざCDを買いに？ 家の近くにないのかい」

「この町にや店がねえし、面倒なんだよなー」

自転車のかごの中身を覗くと、四角いケースの角がちらりと眼に入った。

「もう買ってきたみたいだね」

「×××の最新アルバムだ！ 今日発売日なんだよ……って、お前こういうのに興味なかったっけ」

「知ってるよ。今年で活動二十周年を迎えるバンドだろ。誰だって名前くらいは聞いたことある」

「はは、すまんすまん！ 悪かったな」

そんなやりとりを続けながら、僕は近くのファミレスを見つけた。

持田が裏手の駐車場に自転車を停めに行く間、僕は先に店内の席を確保する。案内されたテーブルは窓際の日当たる場所だ。

「おう、おまたせ」

「来るの遅かったな。先にメニューを選んだよ」

「別にかまわんよ。ちなみにどんなの選んだんだ？」

「カルボナーラ」僕は答えた。「この店、手ごろな値段で食べられるみたいだね。品ぞろえも学校近くのファミレスとは大違いだよ」

「ん？」

「どうかしたのか」

「いや、だつてお前……ま、いいか。何でもねえ」

どこか含みのある様子だった。

とはいえ、すぐに注文が来たので、僕の関心は湯気の立つパスタに注がれた。

僕はフォークを手にした。

「八坂つて左利きだっけ？」

指摘されてふと自分の手を見ると、確かに持ち手が逆だった。

（……ああ、なるほどね）

言われてみなければ、癖は気づかないものだ。さつき持田が変に思った理由も、そこに違いない。

「両利きだからね。たまには左手も使おうと思って」

取り繕ったような説明。我ながら嘘は下手だ。

期間サービスで食後のコーヒーが一杯ついてくるらしい。もちろん無料なので、僕たちはあらためてメニューを手にとった。僕が選んだのはアメリカン。ガムシロップなどはつけない。化学調味料のように、本来の味を大きく損ねるといいうのが性に合わないのだ。

コーヒーはさっそく運ばれてきた。砂糖の入ったビンがテーブルにあるのだが、僕は何もかけずに口にする。

「……なあ、おかしくねえか」持田は言った。「お前、ブラックは苦手じゃなかったっけ？」

「ん、ああ、そうだね」

「さっきのカルボナーラもそうだよな。前に『食感が粘つくくて嫌だ』と言ってたくせに、それも頼んでるし。なんでだ？」

「たまには新しい可能性を試さないかね」

「そ、そうか？」

「そうだよ。同じものばかり食べるのもよくないだろう。案外そういうのって、食わず嫌いなだけかもしれないし」

適当にごまかして済ました。

（持田が奇妙に思うのも無理はないか）

僕はカルボナーラが嫌い、あっさり味の和風パスタを好む。学校の自販で買う缶コーヒーも、カフェオレばかりだ。

……そう、どれも八坂なら選ぶはずのないものだ。

なぜならそれは、雨城の好みなのだから。

僕は八坂であると同時に、雨城でもある。

（とはいえ、あまり昔の頃の癖を出すと面倒だな。他人の癖つてのは意外と目につくらしいし）

ふと、コーヒーカップに目をやった。

カップを持っている手は左。

僕はそれを右手に持ち替えた。

「ところでさ、持田ってよくそのバンドのCDを買うよな」

話題を逸らす意味で語りかけた。

「おう、俺、このバンドの1stアルバムから全て持ってるんだぜ」

「本当かい。シングルも？」

「いや、さすがにそこまでの金はねーけどよ。それでも新曲のシングルはレンタルで聴いたりするぜ」

「それだけで立派に熱心なファンだよ」

「実はな、今日買ったアルバムには抽選券がついてるんだ。しかも今度の全国ツアーのチケットだぜ？ 抽選に当たれば俺の人生初のライブだ！」

「今まで見に行ったことないのか」

「それが中々当選しねえんだよなー。オークションとかで見かけるチケットは会場が遠すぎるし」

「抽選に当たっても、会場が遠いなら同じことだろ」

「逆だよ、会場が選べる。つつか当たって見に行けないなんて悲劇だぜ」

「ああ……確かにな」

僕は頷いた。特に興味のない事柄なので、そこで話が途切れる。

「そろそろ行こうか」言いかけたのは持田からだった。「早く家に帰って曲聴きてえし」

「ああ」

伝票を取って立ち上がる。レジに向かおうと振り返る。そこで僕は目を見開いた。

「……あのさ、少年。ちょっといいかな？」

どこかで見たような男が、作ったような笑みを浮かべていた。

おそらく大学生であろう。流行りの服装に身を包み、人を寄せ付けそうな雰囲気醸し出している。そして、いかにも明るそうな笑

み。見る人によつては、嫌悪感を抱かせるような作為を感じるものだが。

覚えている。

というより、僕は何度かこの人を見かけている。

「あなた、確かこの間の電車で」

「そーそー！ 酔っ払いのお姉さんがいたでしょ。あの時に同じ車両に乗ってたんだけど。思い出した？」

「ええ、覚えてますが……あの」

「あ、俺、森谷健治。よろしく」聞いていないことを口にする。僕も一応名乗った。「へー八坂クンか。よろしく」

「それで、俺たちに何の用っすか」

持田が後ろから尋ねた。

「それなんだよ！ いやーあのね、こういうこと言いづらいんだけど」

「はい……？」

「金、貸してくれないかな」

「は？」

「……え？」

「いや、本当はこんなこと年下の高校生に頼みたくないんだけど。君たちだけしかないんだ。食事代五百六十円なんだ。頼む、すぐ返すから！」

「い、いやいやちょっと待ってくださいよ！ なんで僕が食事代なんて払わなきゃいけないんですか。理由を説明してくださいよ」

「おい、八坂。行こうぜ」軽蔑の眼差しを男に向けながら、持田が言う。「こういうのは相手しねーほうがいい」

「す、すぐ家に帰って返すから！」

男の表情に明らかな焦りの色がにじみ出る。

「……いや、その」

「自分の金で払えよ」

「それがさ、財布を家に忘れちゃったんだ」

「食べなきゃいいじゃん」

「あ、ハンバーグはもう胃の中。無理」ハンバーグ定食を頼んだのか。

「店員に話せば？　すぐ戻るって」

「いや、さすがにそれはまずいって。俺一人だぜ？　理解してくれないって。ぜってー食い逃げ扱いされるって」

声が小さくなっていく。店員に聞かれるとまずい会話なのは確かだ。

森谷の会話から察するまでもないが、どうやらこの男は財布を持たずに来たらしく、全部食べつくした後に気付いたことらしい。もう一時間も立ち往生しているとか。

友達に来てもらって立て替えてもらえばいい……僕がその案を切り出すと、

「携帯も家に置いてきた。充電してなかったし」

呆れた答えを返された。

店内や店の近くに公衆電話もない。しかも、そういう時に限って店に来る客に知り合いがいない。ようやく見つけたのが、僕たちと言っわけだ。

……知り合いでもないのだけれど。

15 記憶3

「じゃあ僕が携帯を貸すので、それで森谷さんの友達に連絡してください」

「うーん、番号覚えてないんだよなあ。登録しっぱなしでいちいち覚えるものじゃないし」

「なら自分の家に連絡しろよ」

「あ、俺一人暮らしなんだ」

「じゃあ知らね」

大の男が高校生に金をせびるという時点で情けない話だし、たとえ一時的だとしてもこんな奴に金など払いたくもないのは持田と同意見だ。それに森谷が金を返す保証もない。願わくばそんな卑劣な人間であつてほしくないものだが。

とはいえ、彼に打つ手がないのも確かだ。

財布は家にある。だが森谷自身はここから動く手立てがない。残された時間も少ない。ずっと店の中には店員に怪しまれることだろう。

何とか森谷が会計を払って、外に脱出できる方法。それでいて、僕たちが金を払わずに済む方法。

この二つを同時に成し遂げる方法は、いくらある。

「僕が森谷さんの家に行つて財布を持ってくるというのはどうですか？」

「……そこまでする必要ねえって」

「僕も払いたいとは思わないよ。それでも、困っている人を放っておくのも後味が悪いものでね」

「つたく、甘いよなあ」

持田は不満そうにため息を吐いた。

「取りに行ってくれるの!？」森谷がうかがった。

「家の鍵さえ貸してくれれば」

「貸すよ貸すって！ もっちらんさ！」喜々として僕に小さな金属を渡した。「ちょっと待ってて！ 住所も紙に書いてあげるから！」財布は居間のテーブルの上にあるらしい。黒っぱい革製だという。僕はメモを受け取った。

「いいのかよ。俺は行かねーぞ」

「なんだい、こんなチャンス滅多にないじゃないか」

僕が意地の悪い笑顔を作ったので、二人は怪訝な表情を浮かべた。「もとはといえばあなたの責任ですから。僕が家の中で何をしようが、文句は言えせんよ、ね……森谷サン」

二人の表情が分かれた。成程とほくそ笑む者と、凍りつく者。自分たちの会計を済ませ、僕たちは揚々と店の外に出た。

「お前も中々悪知恵が働くじゃん。あいつの自業自得だし」

「ま、実際にモノを取るわけじゃないけどね。ただ金を払うだけじゃ癪だ」

「何があるか楽しみだ！」

「おいおい、あまり家を覗くのは良くないぜ？」

僕たちは時代劇の悪役のように笑い合った。

森谷の住むマンションは店の近くにある。

八階建てで、白地の真新しい建物。僕たちはエントランスに入った。教えられた暗証番号を、横の機械に入力する。

「確か八〇三号室だったな」

エレベーターが開いた。マンションの外から秋風が吹きこぼれる。十月に入ったのだと感じさせる、柔らかな涼しさ。夏の色合いは既に消え失せている。

僕たちは一つづつ扉を確認する。『森谷健治』の表札が目に残まった。

「あの人、確かこういう読みをする名前を名乗ってたよね？」僕は持田に聞いた。漢字でこう書くというのは、実際に文字で見ないと

わからない。僕が名乗る時に漢字まで教えるのも、そうした面倒を省くためだった。

「ほかの表札はみんな名字からして違うし、同姓同名がマンションに住んでいるわけじゃないだろうから、ここだね。じゃあ鍵を開けよう」

玄関扉は簡単に開いた。

早速中に入る。外はまだ日が高いので、照明を落とした部屋の中もそれなりに明るい。

「森谷ってやつ金持ちなんだな。けっこう広いぜ。あー俺もこんなマンションに住みてえな」

「大学生にしてはそうかもね……いや、ひょっとしたら社会人なのかも」

「あいつ何なんだ？」

「調べてみたらどうだい」

それもそうだ、と持田はあちこちの部屋を調べ始める。僕は居間に入った。

窓から光の差し込む部屋の中央に大きな木製のテーブル。上には充電器に収まった携帯と、黒っぽい色の財布。

「財布と……携帯も一応持って行くかな」

充電器から外すと、画面が点いた。その画面にはメールの着信表示。

メールの中身まで見るつもりはなかった。

ただ、携帯の機種からか、送信元の名前も画面に表示されていた。僕はそれを何気なく見やった。

「……若菜 綾？」

僕は少しばかり目を見張った。

16 記憶4

森谷の携帯に表示された『若菜 綾』の文字。二人のつながりを示す証拠、だろうか。

森谷と若菜。あの酔っ払いと出会った日の事を思い出す。九月十五日の夜、駅のホームだ。その時の二人は、たまたま同じ場に居合わせた他人同士という感じだった。

そして、車内での騒ぎ。

あれは僕が若菜と知り合ったきっかけでもあるけれど、森谷もまた、あの後どこかで若菜と鉢合わせたのだろう。

僕は何日か前にも、二人が楽しそうに話しているのを目撃している。

(……へえ、意外なつながりだな)

「八坂！ ちょっとこっち来てくれ！」

玄関の近くから持田が声を荒げた。

僕は財布と共に携帯をポケットにしまい込み、居間を出た。廊下から玄関の横にある部屋に入る。森谷の個室だった。机の前に持田が立っている。汗が顔に吹き出て、表情が強張っている。僕は訝った。

「どうした？」

「こ、これを見ろよ……！」

机の上に横長の紙が数枚ほど置かれている。

それは……ライブのチケットだった。正確に言うと、持田が今日買ったアルバムのバンドの、全国ツアー招待券。

持田があれば欲しがっていたものが、目の前にある。

「おい、やめておけ」僕は忠告を入れた。「確かに部屋に入ってもいいとは言われたけど、さすがに物を盗るのはよせ。何をしてもいいというわけじゃない」

「で、でもよお」

「でもない。ほら行くぞ」僕は持田の腕を掴んで、部屋を出た。
「……ううー」

「諦める。チケットを取りたいならアルバムの抽選券があるじゃないか」

「でもさ、その抽選で当たる確率はものすげえ低いんだよ……に、睨むなよ。俺だってさすがにそこは我慢するって」

「チケットを取るのにそこまで苦労するんだろ？　だったら森谷さんだって、やつとの思いであのチケットを取ったに違いないよ。それを、横から掠め取る権利は誰にもない。一見すると大したことないかもしれないけど、立派な犯罪だ」

「じゃあさ、八坂」それでも持田は食い下がる。「あの人に聞くぐらいのことはいいだろ？　もしそれで断られたら俺も諦めるよ、な、それでいいだろ？」

「まあ、本人に聞いても無駄だと思うけどね」

「え、いいよ？」森谷は言った。「あれ、元々ネットオークションに転売するつもりだったんだ。もちろん値を釣り上げて……どうやって手に入れたのかって？　俺の親父の知り合いがそのバンドのプロデューサーらしくって、売れ残ったチケットがあるからってもらったんだ……あ、うん、もちろんあげるよ。大して値がつかないさうだし、君らへのお礼だ。すぐ近くの会場みたいだし、行ってみれば？」

持田は雄たけびを上げた。

「いいんですか？」携帯と財布を渡して、僕は尋ねた。

「そのバンドの曲は好きだけどね。特にファンってわけでもないし」

「……はあ、ありがとうございます」

「八坂！　三日後だ、予定を開けておけよ！」

「え、なんで僕も行くことになってるの」

「は？　こんなチャンス二度とねえんだぞ！？　お前も来いよ、××の魅力を一から教えてやる！」

「招待券はちょうど二枚あるし、いいんじゃないの？」

玄関から出てきた森谷がそう言った。その手には部屋から持ってきたチケット。僕はしぶしぶ承諾して、チケットを手に取る。

「おい、俺に預けさせてくれ」持田が言った。「お前じゃ間違えてこのチケットを捨てちまう可能性がある。当日まで俺に保管させろ」失礼だな。僕はそんなことはしない。まあいいけどさ

「いいか、学校始まる前日だぜ、三日後だぞ、十月四日の昼にいつもの駅前集合だ！」

「わかったって」

持田は自転車にまたがって勢いよく去って行った。

「……熱狂的なファンって、ああいうのを言うんでしょかね？」

「彼はまだまだだと思ふなあ。あのバンドにはもっと激しいファンもいるらしいから」

「理解できない世界ですよ、本当に」僕は首を左右に振った。雨城の頃からそういうことに興味がないので、どうしても冷めた目で見してしまう。

「あ、そういえば森谷さん。携帯にメール、来てましたよ」

「え、マジで？」携帯を開いた森谷の表情が緩む。「……ああ、これね。部の大会があるから見に来てくれ、って言っても君にはわからないかな」

「若菜さんと知り合いだったんですね」

「何だ、知ってるのかい？」

「ええ、同じ学校ですし、あの酔っ払いの騒ぎがあって以来よく会ったりしますから」

「あのお姉さんがやらかした時か。俺も同じだよ。あれ以来、若菜ちゃんと通学の時間帯がよくかぶってさ」

「へえ」

「電車の中で何となく話すうちに、大会の話を聞いたの。それで行

くつて言ったら連絡先を覚えてくれたんだ」

「行くんですか？」

「そりゃもちろん。大学の友達誘って見に行くよ。ついでに部の女子と合コンでもしようかなって計画中」

僕は苦笑した。

「……ところで森谷さん。あの占い師に会いました？」

「会った会った。前世占ってもらったし」

「若菜さんも前世の記憶を取り戻したって聞きましたけど。やっぱり森谷さんも……」

「そうだよ」軽くうなずいた。「不思議だよな。自分が全く関係のない他人とつながっていたなんてさ。ま、こんな話君と若菜ちゃん以外できないんだけどね」

「他人に話したら変な目で見られそうで怖いですもんね」

「はは！ そりゃそうだ。死んだ人間が生き返ったって騒がれるに決まってる」

ふと僕を見やって、森谷は続けた。

「でも、せめて昔の家族には言ってやりたいよなあ」

僕はしばらく言葉に詰まった。

「……森谷さんは、やっぱり行きたいと思いませんか？」

「ん、どこに」

「生まれ変わる前の自分が住んでいた町に」

「行きたいよ」森谷はそう呟いた。「そういうのってさ、気持ち的には、引越してから二十年くらい経って、またその町に戻るの同じじゃないかな？ 昔の知り合いに再会したり、思い出の場所に行ってみたり。俺も都合がつけば、そこに行こうと思ってる」

もちろん死んだ人間として振る舞えるはずもないけどさ、と言いつつ足した。

僕は何も答えられなかった。

17 記憶5

森谷と別れて、僕は自宅に戻った。

部屋のベッドに横たわって、しばらく考え事をしていた。窓の外の日が傾くのを眺めていた。

明かりのついていない部屋は、いつしか薄暗くなっていく。それでも僕はベッドから動かなかった。

そばの机に目が向く。机の上にやりかけの問題集が置いてある。

このところ勉強が手につかない。何日も同じページを開いたままだ。

(……僕も、森谷さんと同じだ)

あの町に戻りたい。

その想いは記憶を取り戻した時からずっと変わらないままだ。それは自分の意志ひとつで可能なことだ。行動するだけでいい。行くことができるのだから。

でも、僕はそれができない。

過去と向き合うことが怖いのだ。

かつての僕が犯した、身勝手な行為。そばにいた人たちを、深く傷つけた事実。それに目を背け、『八坂洋一』という他人の顔でのうのうと帰れるだろうか。

僕には、不可能だ。

まだ、答えを出していない。

僕自身がどうあるべきか、考えなくちゃいけない。

それが、彼らへの罪滅ぼしの一步。

決して赦されることのない、罪滅ぼし。

(いずれ……会いに行こう)

虚空を見つめながら、僕は独り、静かに誓った。

18 記憶6

「おい、こつちだこつち！」

待ち合わせ場所の駅前には一足先に持田が来ていた。登校時と同じように余裕を持って来たはずの僕は面食らった。

「いつもは学校に遅刻するのに、こういう時は早いんだな」

「俺だって本気出せば遅れねえんだよ！」

「まあ今回は学校と違って早起きする必要ないし、昼に起きてても充
分間に合うからな」

「うるせえなめんな！ 今日俺は朝五時から起きてたんだぞ！」

「はいはいわかったから早く行こう」

僕たちは早速バス停へと向かった。

会場行きの停留所には溢れるばかりの人が列をなしていた。並ぶ人たちのほとんどは僕と同じ行先なのだろう。中には小道具を抱える人もバスを待っていた。

「今四時過ぎたけど、開始はいつ？」僕は持田に尋ねた。

「七時」

「早すぎないか」

「んなことねーし。朝から開場待ちの猛者に比べるとまだまだ」

「そんな猛者にはなりたくないな」

バスの中は混雑していた。僕はつり革に手を預けながら、バランスを崩さないようしっかり足を踏みしめる。

「四人組のバンドって聞いたけど、リーダーはベースの人なんだってね？」

「そう。『Lock』っていう名前。ボーカルは『Heit』、ギターは『Kenny』、ドラムスは『Youk』だ」

「外人？」

「違えに決まってるだろ。全員本名は謎だけだな」

「ボーカルの人、テレビで見たけど彫りが深いからよその国の人か
と思ったよ」

「あー、それはある。でも歌唱力はパねえぜ」

持田からバンドの話を聞くうちに、バスの扉が開いた。終点。僕
たちはバスの外に出て人の流れに乗った。

会場はこの地方で有名なスタジアムだった。

既に入場は始まっていた。

「八坂、森谷さんからもらったチケットだ。大切に失くすなよ」

「大切に持っていて失くすなよ、って言いたいのかい？」

「失くすんじゃないぞ！」

おびたらしい人の群れに紛れるように、スタジアムの中へ入る。

どうやら僕たちの席はステージから遠くないらしい。一番後ろで
もいいのに、と言うと持田に呆れられてしまった。

周辺にはグッズ売り場。立ち並ぶ人で店は賑わっている。既に売

り切れの張り紙があちこちに掲げてあった。

「うっわ、マジ遅かったか。サイリウム売ってるかなー？」

「……なんだい、その『さいりうむ』って」

「蛍光ライトのことだよ。ちよつと買いに行くから先に入ってく
れ」

「じゃあそのサイリウムってのとパンフレット、僕の方もお願い」

「おっけー」持田と別々に分かれ、自分の座席を探す。

周囲を歩き交うのはカップルや家族連れ、それに何人かグループ
で固まっている人ばかりだった。

一人で来ている人が案外少ないことに僕は気付いた。こういう場
所に一人で行くには少し勇気があるかもしれないな、と何気なく思
う。

いや、もしかしたら個人でライブを見に行く人だっているかもし
れない。僕にはその辺りの感覚がわからない。何しろライブに来る
のは初めてなのだ。雨城と名乗っていた頃も、ライブを見に行った
ことはなかった。

(……あの頃の僕は、そもそも友達に誘われることなんてなかったっけ)

まわりに誰もいなかった頃の、遠い日のことに思いを馳せる。

友達がほとんどおらず、ずっと独りだった日々。

八坂として生を受け継いだ今はそれなりに友人にも恵まれている。どう振る舞っても結局独りになってしまったかつての自分からすれば、想像もつかない『未来』だろう。

誰かと遊びに行くということ。

孤立していた自分だからこそ実感できる。それが一見すると他愛もないことであって、貴い経験なのだということを。

(あつたぞ、会場マップ)

特設されたボードを隅々まで眺め、ようやく現在地を把握した。

……あるうことが、目的地と正反対のブロックに来てしまっている。

(ま、自分が方向音痴なのは生まれる前から知っているけどさ)

僕は深く息をついた。

後ろの影に気づいたそんな時だった。

僕は何の気なしに振り向き、そして固まった。

「……へ？」

間の抜けた声が相手の口から漏れる。

しばらくその場に沈黙が流れ、お互いにその知った顔を見合った。

「あの時の」僕はゆっくりと、確認するように言った。「あの時の、占い師さん、ですよね？」

「え、ええ……」

その問いかけに、『旅人』はこくりと頷いた。

「あの時の占い師さんですよ。どうしてこんな所にいるんですか？」

「君こそどうしてよ」

「いや、僕はライブを見に来ただけで」

旅人はまるで不思議そうに首をかしげていた。もちろん今日は酒に顔を赤らめておらず、服装もラフな格好で通している。その手にはパンフレットやグッズ。この人がライブを見に来たのは明白だった。

「……へえ、こういうのに興味ないまじめ君かと思ってたけど。君も×××のファンだった？」

「違いますよ。ただ友達に連れられて来ただけです」

僕はここに至った経緯を説明した。森谷からチケットを受け取ったことを聞いて、彼女は笑みをこぼした。

「あの大学生の人からねえ。なんていうか、不思議な巡り合わせ」

「こつちだつて驚きですよ。まさかあなたにまた会うなんて」

「いやあ、私はよくライブに行くし。確率が低いのはむしろあなたの方じゃない？」

「……佳苗」

平坦な声だった。

佳苗と言うのはこの旅人の名前なのだろう。彼女がはつと気づいたように後ろへ視線を向けたのはその証拠だ。

呼んだのは誰だろう。

僕は首を傾けて、彼女の後ろに立つ小さな輪郭を見やった。年が同じくらいの女の子だった。

一人で退屈そうに、後ろの壁にもたれている。

「その人、知り合い？」女の子は言った。

「うーん、知り合いと言うより恩人の一人？」

「……」

「佳苗っていうのはあなたのこと、ですよネ？」僕は窺った。

「うん、私、わたらいかなえ渡会佳苗っていうの。よく旅をしながら占い師やってるわ」

「知ってますよ。前に聞きましたし……」

言いかけて、ふと思いつき出した。

雨城の記憶を僕に思い出させた原因が、彼女の占いにあったことを。

この人は今の苦悩を僕に与えた張本人だといえる……だが僕はそこで思い直した。望んでいなかったとはいえ、占い師を恨むのはお門違いだと気づいたのだ。

わだかまりを心の中にそっと仕舞い込む。

そうして僕は自分の名前を名乗った。例によって、名乗った後に自分の漢字を説明する。

「八坂君ね、改めてよろしく。それと」渡会は少女の肩に手をやって、言った。「この子は中条ユオ。近所に住む子で、一緒にライブに来てもらったの」

「どうも」

「……」

「もう、挨拶くらいはしなさい！」

渡会が軽く叱責すると、彼女は暗い目つきをそのままにそっぽを向いた。

渡会はごまかすように苦笑した。

「まあ、こんな感じの……ちょっとひねくれた子なの」

特にそれで腹を立てるといふこともなかった。

少し長めの荒れた髪に、同じ年代の女の子にしては地味な服装、見るからに華奢な外見。それでいて、強い影を帯びた、彼女の眼差し。僕は――

(……似ている……?)

—— 何かが、心の中で引っかかった。
じんわりと、心臓がせり上がる。

この、言い知れない感覚は、何だろう？

「なに？」

彼女の刺すような視線に気付いた。

じっと見つめていることが気に障ったのだろう。僕は言葉を濁して、渡会を見やった。

「ところで渡会さんの席は？」

「Aブロックの端っこよ。抽選で当たっただけでもありがたいものだけ」

「あれ、アルバム発売されてからまだ三日しか経ってませんけど。もう抽選が終わったってことはないですね」

「違うわよ。その前に発売されたシングルの方の特典に当たったの」

「ああ、そういうことですか」

「って。話もいいけどもう時間だからそろそろ行きましょう」

「そうですね。みんな中に入っちゃったみたいですし」さっきまで混み合っていた周辺に人の気配が消えていた。ここにはほとんど人が残っていない。

「じゃあ、僕の席結構遠いので、これで」

「ねえ、もう一ついい？」急ぐ僕を渡会が制して「折角会ったんだから、ライブ終わったらどこかでご飯食べに行こうよ」

僕は少し考えをめぐらせて、頷いた。

「でも……どこで待ち合わせるんですか」

「会場の入り口ゲートはどうかしら。ゲートは一つだけだし、出る前で待ってて」

「わかりました」

「……話すなら勝手にして」

低い声が耳をついた。

「何言ってるの。あなたも来なさいよ。何も食べないで帰るつもり

？」

「佳苗たちで食べに行けば？ 私は一人で帰る」

「だーめ」

敵意のこもった目つきを向けられても彼女は動じない。いつものことなのだろう、と何となく悟った。

「こらー、お前すっぱかすつもりだっただろ！」持田の怒号が流れる曲とともに鼓膜を打った。「どうして俺よりおせえんだよ。それともあれか、道に迷ったとかか？」

「生まれる前から方向音痴なものでね」

「何だそりゃ」

嘘はついていなかった。

「本当のことを言えば、知ってる人にばったり出会ってね。挨拶してきたんだ」

「学校の知り合い？」

「いいや、違うさ」

前世の記憶を僕に取り戻させた占い師。そう言いたかったけれど、僕は言葉を飲み込んだ。

思い出したのは苦い感情ばかりだし、最初は彼女を恨んだことも確かだ。だが渡会に憎しみを向けるのは間違っている。それでは何も変わらない。

同じように記憶を取り戻した若菜や森谷は過去と向き合っているのだから。

会場に流れていたサウンドが鳴り止んだ。いよいよライブが始まる。僕は期待を込めてその開始を待った。

暗い空間で、目に悪い光の点滅。

胃を揺らすドラムの音。

もはや狂ったとは思えないボーカルの奇声。

それに輪をかけたような、音量の壊れた歓声。
目と耳が、イカれてしまいそうだ――！

気付くと僕は会場の外へ抜け出していた。

20 記憶8

盛り上がる持田をよそに僕は会場の外へ出た。扉の横にいた職員が再度入場できると言ったが、もう戻るつもりはない。

「何であんな騒音、平気で聴けるんだよ」

激しい曲調の歌が外にまで響いてくる。僕は痛めつけた耳をそつと片手で撫でた。手でふさぐと、キーンと鳴っている。

「……今度から持田に誘われても絶対に来ないぞ」
独り呟いた。

何人かが外で束の間の休憩をとっている。中には仕事の合間に来ている人もいるらしく、スーツ姿の男がベンチに腰かけてパソコンを打っている。

（それより何か飲もう）

辺りを見回す。売店を見つけたが、めぼしいものは残っていない。店員に訊くと、反対側に自販機があると教えてくれた。

渡会とばかり出くわしたBブロック。時計回りに廊下を回ればすぐに着くという。

ゆっくりと歩きながら探す。はたしてそれは何台かまとまってあった。

僕は小銭を手に握った。

「……あれ？」

自販機と向かい合うように、一人の少女が柱の下で佇んでいた。彼女はおもむろに僕を見やった。

観察するような眼差しは、どこか薄暗さを感じる。

渡会からは、中条という名前を聞いていた。

「中条さん、だよな」

「……」

無言のまま目を伏せる。話す気はない、という明らかな意思表示。僕は愛想笑いを浮かべて、自販機に向かい合った。

小さなペットボトルの水が最も安い。僕はそれに百円玉を入れ、取り出すために一度屈んだ。

「え？」

立ち上がる前に、後ろから気配を感じる。

そのままの姿勢で見上げる。どうしても、中条が近くに寄っていた。

「……あの、何か」

「一つ聞きたいことがある」抑揚のない声が僕に問いかける。「佳苗とどこで会ったの？」

どうやら渡会と知り合った経緯を聞きたいようだった。

「酔って吐いていたところを介抱したんだよ」僕はそう答えた。「その場にいた人たちと手伝って、駅員さんに引き渡して。それがきつかけかな」

「あの人らしいわね」

かすかに目を細める。

「でも会ったのは今日で三度目だよ。名前も知らなかったし、本当に今日会ったのは偶然だ」

「……ふうん」

「そういえば、君はどうしてここにいるんだい？」

「決まってる。うるさいからよ」

淡々と答える。僕はさらに聞いた。

「戻らないの？」

首を横に振って、彼女は否定する。

「僕もそうだよ。外に出た理由は多分君と同じだ」

水を何口か含んで少し間を取る。

「友達に無理矢理誘われてさ。本当はこういうのに興味ないんだけ

ど、行かないのももつたいたいと思つて来たんだ。まあ、義理は立てたかな。もう中に戻るつもりもないや」

「佳苗にしつこく誘われた」中条は小さく口を開いた。「私には行く意味なんてないし、『一人で行けば?』って言った。そうしたら『一人じゃ寂しいから一緒に行こう』って」

彼女は深く息を吐いた。その顔にほんの少し疲労の色がにじむ。

「何度も言ってくるものだから、私も諦めてここに来たの……何で私を誘うんだろう」

「中条さんと一緒に行きたかったからじゃない?」
じ、と僕に視線をよこす。

「こんな場所に一人で来ても、渡会さんの言うように寂しいだけだよ。僕が言うのも変だけど、それって単に曲を聴きに来ただけじゃなくて、一緒に楽しみたい人がいるからじゃないのかな?」

「それでも、私じゃなくていい。他に人を誘えばいいのに」

「違うよ。そうじゃなくて、あの人は仲のいい友達と一緒に行きかけたんだ」

「……ともだち?」

「渡会さんにとって、一緒にライブを楽しみたい人が、中条さんだった。たぶん、それだけだと思う」

彼女は首をもたげた。

コンクリートの床を見つめたまま押し黙る。ふと僕は外を見る。

既に闇が広がっていた。

「何て……迷惑な」ぽつりと呟いた。「一人でいたいのに、なんでそんなにしつこく私を……」

「君が一人でいようとするから」

僕は静かに言った。

「中条さんがどういう人なのかは知らない。けど、そうやって人を拒んでいるから、渡会さんは心配なんだと思う」

かつての自分がこの少女に重なって見える。
似ているところかまるで同じなのだ。

かつての僕、雨城結太と。

人を遠ざける態度、孤立を好む性格。

それは自分自身を見ているかのようだった。

「そんなに一人でいるのが悪いの？」平坦だった彼女の口調がわずかに波立つ。「誰にも迷惑なんてかけていないのに……ずっと独りでいたいのに」

「誰もいない人生なんて、望むものじゃない」

彼女を見据え、僕ははつきりと言った。

「人と関わることを拒み続けると、いつか全てを失ってしまうんだよ。少なくとも僕はそう思うし、渡会さんもきっと……そう考えているはずだよ」

間を置いて、僕は続けた。

「難しいなら、無理に付き合わなくてもいい。でも、たまには渡会さんの好意に応えてあげないと」

言って、ほんのわずかな沈黙。

会場から響く曲調ががらりと変わる。バラード系。バンドの代表曲だと持田から聞いた。

ボーカルの高い声が、黙ったままの僕たちにこぼれてくる。

「……まるで、わかったように言うわね」

やがて彼女は呆れたように首を振った。

赤の他人に、そんなことを言われるとは思ってもいなかったのだろ。僕も少し恥ずかしくなった。

「言いすぎたかな。悪い、聞き流してくれていいよ」

「そうするわ」

あっさりと言い、僕に背を向けた。帰るのだろと、僕は何気なく悟った。

その何歩目かで彼女は止まった。

体を反転させて、また僕と向かい合う。

「……努力は、してみる」

感情に乏しい声に乗せたのはその言葉。
僕は笑みを浮かべ、ゆつくりと頷いた。

21 記憶9

「だからさ、ライブの最後の曲、アレ新曲なんだって！俺たち世界で二番目に聴けたんだぜ？」

「一番目は誰なんだい」

「×××のメンバーに決まってるだろ」

会場の外で待っていた僕に持田はまくしたてた。ライブの終了とともに辺りはまた人の声で埋め尽くされたが、持田の声はそれに劣らず僕の耳を叩く。ああそうよかったねと相槌を打ちながらも、僕はうんざりしていた。

「ところでよ、八坂お前どこ行ってたんだ？」

「あんまりうるさくない席に移動していたんだよ」吐き捨てるように言った。持田はそれをあくまで会場の中だと認識したらしい。会場の外に抜け出した事実は知らないようだった。

「これから顔見知りの人とご飯を食べに行くんだけど、君も来るかい」

「おお！……いや、遠慮しとく」

「どうして？」

「この興奮が収まらねえうちに帰ってブログにアップするんだ！人生初のライブ体験記だからな」

「へ、へえ……」答えることが見つからない。こんな奴だったけど内心首をかしげる。

こうして僕は一人残された。

「しょうがない、あまり待たせるのも失礼だし、行くか」

雑踏を縫うように歩き、ゲートの入口へ。渡会是人混みから離れるように柱の下で立ち尽くしていた。

どこか浮かない様子だった。

「あれ、友達は？」渡会は視線を向ける。

「用事があるって先に帰っちゃいました」

「あら」

「どうやらそっちも、みたいですな」

「そうなのよー、ねえ聞いてよ」困ったような表情を見せて、「あの子がいないから探したらメールが来たの。そうしたら『先に帰った』だつて！ ひどくない！？」

「なんで帰ったんですかね」言いながら、僕は何となく察していた。ついさつき会った本人は、あからさまに嫌そうな顔をしていたのだから。

「『興味ない』って。あの子だったらもう……こういう協調性のなさ
はちよつと困りものね」

「どうして誘おうと思ったんです？」

「休みの日はずっと家にこもってるのよ」僕の問いかけに、ためらいがちに口を開く。「だからさ、たまには外に出て楽しみつてものを覚えてもらいたかったの。親心のつもりだったけど、あの子からすれば余計なお節介なのかな」

「そうだったんですか……」

『ずっと、独りでいたいのに』

中条の言葉が脳裏によぎる。

おそらく真実なのだろう。勢いにまかせて口が滑ったにしては重すぎる。言葉の裏に感じた彼女の意思の重さ。実感のこもった重さ。彼女が本当に孤独でいたからこそ、それは偽りのない言葉として現れたのだ。

あの子の自分が、彼女の中にある。

（似ているだけじゃ、ないよな）

——着信音が思考を遮る。

「誰からだろう？」

渡会の携帯だった。どうやら中条からで、追加の返信メールのようだ。

彼女の様子を傍らでうかがう。途端に渡会の表情が驚愕を示した。「……え、ちよっとこれ」かすかに狼狽しながらも、彼女の口元は緩む。「嘘、あの子がこんなことを言うなんて。あ、ありえない！」「どうしました？」渡会が差し出した大量のストラップ付き携帯を受け取り、その画面をのぞきこむ。僕は目を見開いた。

『今日は帰るけど、今度いつしよに二人でごはん食べにいこ』

「……お誘い？」渡会の声が震えていた。「この子、普段は自分からこんなこと言わないのに。何があつたの？　どういう風の吹き回し？」

それは、ほんのささやかな文章。

けれど……確かな変化。

言葉は、届いたのだろうか？

「別に大したことないじゃないですか」渡会を見据えて「単に気が向いただけでしょう」

そう、彼女の気が向いただけなのだから——こみ上げる何かを抑えながら、僕は言った。

時間も遅く、バスの最終時刻が近づいたこともあって、食へに行く話は立ち消えとなった。それでも僕には渡会に話すことがあった。僕たちはほんのわずかな時間、ゲートの片隅にいた。

「前世の記憶を思い出したの？」渡会は言った。半月前のことを思い起こすように、しばらく視線を泳がせる。納得したように何度かうなずいた。

「あれね、時間と技量があればもう少しちゃんとした思い出し方ができたはずなの」

ふと僕は、空のペットボトルを弄ぶ手を止めた。

「どういうことですか？」

「そのまんまよ。電車の待ち時間ではちょっと足りなかったし、二日酔いで私の腕も鈍ってた……まあどっちも私のせいかな。だからね、本来するべき心のケアができなかったし、君に不完全な思い出し方をさせちゃったわ。ごめんね」

「……それで済ませないでほしいくらいですけど」

「ね、どんな人となりだった」再度、問いかけた。

「人の記憶をのぞいたんじゃないかなかったですか？」

「それもおざなりだったの。私がしたことは、いわば扉を開けただけ。扉のラベルくらいは見ただけ、部屋の中に入ってはいない」

「……とんだ迷惑だ」僕は吐き捨てた「適当すぎる。占い師としても、もうあなたには人生を占ってほしくない」

「結構な言いようね、雨城くん」

「知ってるじゃないですか」

「言ったでしょ。ラベルくらいは見えたって」

どこまで知っているのだろう——僕の勘繰りを見通したかのようには彼女は鼻で笑った。それが余計に僕をいらだたせた。

「君は、帰りたいと思う？」

不意に渡会が呟いた。

「どこに……？」

「昔暮らしていた町に」

彼女は雨城としての僕に尋ねていた。

『俺』の考えを、聞いている。

22 記憶10

帰るべきか。

やめるべきか。

雨城の世界に立ち戻るか。

八坂の世界を生きるか。

あの場所へ、俺は戻りたい。

でもここに、僕の居場所がある。

罪を償うために立ち止まるのか。

まっとうな道を揺るぎなく進むのか。

自分は、そのどちらでもある。

問われているのは、たった一つの意志。

「道は無数にあるわ」

思考をそつと包み込むように、渡会の声が響く。

「一つだけとは限らない……二つだけでも限らない。三つ目だってある、四つ目も、五つ目も。私が聞いているのは、単に限られた選択肢の中から選んだ答えじゃないの。あなたがどう在り続けるのか。まず自分に問いかけて」

一呼吸、間をおいて、

「その上でもう一度あなたに聞くわ。帰りたいと思う?。」

俺自身がどうあるべきか。

答えは。

答えは、

沈黙。

答えが、浮かばない。

迷っている。だから、わからない。

ただ、それだけ。

「うん」

渡会はゆつくりと、しかし大きく頷いた。

「……答えも、一つとは限らないか」

会話はそこで途切れた。

ぽっかりと、穴が空いたように。

その隙間を、風が吹き抜けてゆく。

辺りは既に静まり返り、人の声も耳につかない。

「そろそろ時間かな」言ったのは渡会だった。「さて、切り上げますか」

「……はい」

僕は力なく答えた。

スタジアムの外は閑散としていた。ついさっきまでであったはずの熱気がすっかり消え失せ、飲みかけの紙コップや風に舞う入場済みのチケットばかりがその名残を示していた。

会場脇のバス停は二か所あった。僕と渡会では帰る方向が真逆だ。スタジアムの外を少し歩けば、道を別れなくてはならない。

「最終バス、まだあるかな？」

そんな独り言を呟きながら、渡会は会場のパンフレットに目を傾けていた。

「大勢の人が帰ったってだけで、まだあるはずだと思いますよ」

「ん、やっぱりそうか」

「そうですよ」

「初めてのライブ、どうだった？」

「途中から外に出て聴いてました」

「うわ、それもつたいないよ」

「耳が痛くなっただんです。まあ、友達には言い訳しましたけど。ところで、渡会さんたちはどこから来ました？」

「伊浜町。海沿いの小さな町だよ」

「……ずいぶん遠くから来ましたね」

「知ってるの？」

「ええ、まあ」

「知らないわけ、ないか」渡会は含みのある笑みを浮かべる。「ねえ、八坂くん」

「なんですか」

「一つ、私から忠告しておくね」

不意に足を止め、僕に目を向けた。

分かれ道のちょうど真ん中に。彼女は立っていた。

「あんまり過去に囚われすぎないでね」淀みなく言葉を紡いだ。「あなたは雨城である以前に、八坂くんなの。今を生きているのは、『あなた』のほうなのよ。そのことだけは、忘れないようにね」それは……」

真意を尋ねようとして、僕は言葉を呑み込んだ。

「……いえ、どうも」

「じゃあね。また、いつか」

渡会は小さく微笑みかけて、道を異にする。

彼女の背に、僕はかける言葉が浮かばなかった。

それはおそらく、偶然出会っただけだから。

別れの言葉は思い浮かばない。

かつての自分に似た少女と。

自分の迷いに気づいているであろう占い師と。

今日、あの人たちに会ったことは、ただの偶然なのだ。

(……また、いつか、ね……)

僕は静かに踵を返した。

そうして自分の帰る家へ、再び長い道のりを歩む。

あの町へ行きたいと考えていたはずだった。

なのに、渡会に問われた時の僕は、答えに迷っていた。

心のどこかで、そう願っていない自分がいるのかもしれない。

死んだ人間が今になって、あの町の人たちの日常をかき乱してはならない——どこかで、そう思っているのかもしれない。

頭で考えたことと、心に思っていることが、分かれて離れているようだ。

どちらを選んでも、釈然としない自分がいる。

僕という人間の中で、何かが分裂している。

僕は今、正解のない問題に向き合わされている。

自問し、自答する。

家のチャイムを鳴らすまで、思考は頭の中をぐるぐる巡り続けていた。

23 記憶11

翌日から学校の授業があるので、部屋のクローゼットから数日ぶりに制服を持ち出した。特徴のない公立校の制服。外見からは高校生としか判別できないだろう。

僕はそれを部屋の扉に吊るした。朝起きてからすぐに着替えられるように。

ほかの準備も万端だ。教科書、ノート類は明日必要なものだけをカバンに入れている。机の上には貴重品。走り書きのメモも置いてある。体操服も持っていくこと。明日の体育ではサッカーをやるらしい。運動は苦手だ。

目覚まし時計をいつもの時刻に設定し、布団にもぐりこむ。ライブに行ったこともあって、いつもより遅い時間だ。

明りを落とした部屋に、心地よい秒針の音。

薄れゆく意識の中で、携帯の着信が耳についた。

メールでも来たのかな。こんな時間に送りつけてくるような、親しい間柄の人物。持田の顔がまず頭に浮かんだ。

僕に早く寝る習慣があることは話していなかった気がする。だから、まだ起きているのだと思って送信したに違いない。

一体何の用だろう。

……ライブの話なら、また明日にでも聞いてやるよ。そうか、きつとその話だな。それなら、別に布団を出る必要もない。

数回のコールで電子音が途切れたのを確かめた僕は、すうっと眠りについた。

朝食の玉子スープをすすりながら、新聞記事に目を向けていた。横で流れるテレビのニュースは耳に入らない。両親とささやかな会

話を交わして、僕はリビングを離れた。

支度を整えるうちにメモを見て、体育の授業を思い出す。体操服を忘れてはいけない。

家を出た。町が一斉に騒がしくなる前に登校するので、この時間帯はのんびりと歩くことができる。遅刻をしたことがないのは当然だった。

そこから先はいつもの通学路をたどるだけだった。電車のダイヤが乱れる事もなく、計算通りに学校に到着。グラウンドでは運動部の朝練が始まっていた。

今日も変わらない日常。

八坂洋一の日常。

雨城結太のそれとはまるで対照的に、平穏だった。僕自身の努力もあるが、この平穏は僕を取り巻く人たちによって築かれている。僕も、その中の一員で在り続けられる。

それが、生まれ変わってやっと手に入れた平穏なのだ知ったのは、つい最近のこと。

貪っていた日々のありがたみを、今更になって噛みしめている。

雨城結太の望んでいた日々を、僕は過ごしている。

退屈な日常生活。それがどれだけ恵まれているのか、以前の僕には想像もできなかったらう。

失って二度と戻らないと思っていた日々、僕はいるんだ。

ここにいていいんだ。

傷つけてきた人たちを見捨てて？

彼らからその日々を奪ったのは俺自身だ。

その人たちに振り返りもせず、見向きもしない？

それは、やってはならないこと。

逃げることは許されない。

(……僕は、考えないといけない)

平穏な日々の中で、いずれは彼らの現実を見なければならぬ。
十六年後の世界は、そこにある。

いつか、向き合うであろう、現実。

ゆっくりでいい。だから、考えなきや。

穏やかな日常の中で、時間は多く残されている。

「……騒がしいな」

それは、校舎に入ってからのことだった。

僕の教室は二階にあるが、階段を挟んで同じフロアの反対側には職員室も控えている。階段を上りきったときに、飛び交う声が聞こえたのだ。声は複数の教師のものだが、口調に焦りの色が見える。

延々と続く会話。何かがあったのだらうな、と僕は判断した。ただそれが何かわからない。雨城としての自分はちよつとした騒動を期待してみる。八坂としての自分は、特に思うところもなかった。

（まあ、どうせテストが紛失したとかだろう）

そう推理していたところに、職員室から上級生が一人、僕のもとに現れた。

「あ、おはようございます」

「……八坂」

挨拶を交わした若菜はどこか沈痛な面持ちだった。

表情は固く強張り、普段とは明らかに様子がおかしい。

「どうしたんですか？」 いたたまれず僕は尋ねた。「何か、ありました？」

「何かあったのはそっちのほうだよ」

言葉がうまく頭の中に呑み込めない。しかし同時に、かすかな不安が脳裏によぎる。事態は思ったより深刻なのではないか、と。

「知らないの……？」 どこか不快そうに顔を歪ませて「あー、あなたの方が早く知りすぎたのかな……朝練の関係で職員室に行ったの。そうしたら、聞いちゃったんだ」

僕が聞くよりも先に、若菜は答えた。

「あんたの学年の子が、昨日の夜に自殺したよ」

平穏だったはずの日常は、その瞬間、暗転した。

24 閑話

少年の名前を知る前に、私は雨城結太の名を知った。

彼の前世にあたる男。平凡で、ありふれた名前。人間を前世に持つ人というのも経験上、さほど珍しくない。中にはシベリアンハスキーから人間に生まれ変わったかわいらしい経歴の持ち主もいるにはいるけど。

ともかく、あの時——駅のホームで、電車が来るまでの間——少年から手繰り寄せたのはほんのわずかな記憶だった。時間も足りなかったし、二日酔いだとしても腕が鈍るというもの。雨城がどういう人間なのか、あえて少年からもう一度記憶を探ろうとも思わなかったし、私もすぐに忘れるものと思っていた。

でも……あるとき、私はふと気付いた。

それがどこかで聞いたことのある名前ということ。

私自身の記憶を辿り、やがて父の言葉に行き着いた。いつだったか、知り合いの母親に関する話を父から聞いていた。あまり多くを語らない人なのに、いつもは仏頂面の父が、その時はどこか悲しそうにしていたのを、今も覚えている。

話はその母親と、雨城という知人の男に関する事。

十六年前に起きた事。

私は持っていたコーヒークップをテーブルに置いて部屋に戻り、パソコンの電源を入れた。一つ調べものをしようと思い立った。

何年も使い古したもので、動作の遅さにちよっともどかしさを覚えるけれど、調べたいことはすぐに見つかった。ひと世代前の情報、でもネットの上では色褪せず、まるで昨日のことのように綴られている……私はウィンドウに注視した。

雨城の起こした事件の真相。

その時私は、あの少年が負った罪を知った。

それが、私の引き起こした責任であることも。思い出させてはいけなかったのかもしれない。けれど、後悔したところでもう遅かった。

同時に、私にはもう一度、あの少年と会う必要が生まれた。十六年後の『未来』を、少年に伝えるため。

それから半月が経った頃、私は再びあの少年とめぐり合った。

「佳苗」

だれかの声に意識は戻った。ふやけた景色の先に、ユオの心配そうな顔がにじんで見えた。

「佳苗。酒臭い」

「う、うつつ……」

「ほら、玄関で寝ちゃだめ。カギ、開いてたよ」

「み……水」

何もない所に手を伸ばしながらユオを呼ぶ。たったった、と小さな体格の少女が廊下を行き来し、私の口元にコップを近づける。

「帰りが遅いと思ったら。一体どこをほつつき歩いてたの？ もう夜中の三時だよ」

「……ん？ なんでさ、そんな時間にユオちゃん、起きてるわけなのさ？」

「真夜中に電話で叩き起こしたのは誰なの」

「私です」

言った瞬間、がし、と両手で顔を掴まれた。

首の骨を折る勢いで上半身を反らされる。耳元で、彼女の甘い吐息が私を震わせた。

「……あのさ、もう一度、おなじこと言っただらん……？」

「わ、わたしです、ごごめんなさいすみません」

まずい、目が完全に据わってる。顔を逸らそうにも至近距離で掴まれているから身動きが取れないし、おまけに掴まれた箇所には爪が食い込んで痛い……。

「あんまり飲みすぎると体を壊すよ」

「えへへ、ごめん」

言葉も失せたのだろうか、彼女はそれ以上何も言わず、ドアマットに倒れていた私の体を起こした。華奢な体に力を込めて、足元のおぼつかない私をソファに降ろす。無音の部屋に、彼女の荒い呼吸が耳に伝わる。

「待ってて、寝室からシーツを取ってくるから」

「はい」

しばらく経って、全身を柔らかく包む感覚。そばには小さな少女の姿。

「……ね、覚えてる？」

「何のこと？」

「こないだ会った、男の子。あ、彼氏とかじゃないよ」

「……八坂っていう人？」

「そそ。あのまじめくんオーラ全開の少年」

「あの人がどうかしたの？」

「それがね……」

「佳苗？」

「……あなた、に、にて……」

まぶたにくすぐったい感触を受けて、目を見開いた。窓の外は日

が高い。太陽の高さから考えて、たぶん昼前。

体を起こす。頭がふらついて重い。鉛のような感覚が、起き抜けの体をずっしりと鈍らせる。

足を床につける。バランスが崩れかかる。立ちくらみ。またソファにもたれる。

飲んだ後の朝は半ば制御不能だ。時間が経つまでろくに体のコントロールがきかない。

「うう、気持ちわる……ん？」

ふと私はソファの横に目をやった。

小さな少女が体を預けてすやすや眠っていた。ずっと、付き添ってくれたのだろうか？

「……あー、またやつちゃった」

私は違う意味で頭を押さえた。

好き勝手なことをして。

いろんな人に迷惑をかけて。

そのくせ、自分は人に世話を焼かせている。

でも同じことを繰り返す。

だめだよなあ、自分。

父さんみたいにはなれないわけだよ。人としても、占い師としての腕も。典型的なダメ人間ってやつ。

「もうちょっとしっかりしないといけないのは私のほうなんだけだな……」

何気なく部屋の中を見渡すと、あるものが目に留まった。

キーボードのそばに数枚の紙。書き留めたメモ。

はっと気がついて、それらを机の引出しにそっとしまいこんだ。ちらりと後ろを振り返る。小さな女の子は、まだ寝息を立てている。

私は胸をなでおろした。

……これは、まだ誰にも見せられない。

メモは雨城に関する簡単なレポート。

父の話、パソコンで得た情報、たまたま耳にした噂。それらを突き合わせて、ある一つの可能性を書き残していた。ただの推測、けれど、この子には刺激が強すぎる。隠し通さないといけない。

(……環さんの隠していた気持ち、今なら少しだけわかる)

雨城のした事は決して許されない。

けど、彼はもう、何の罪もない少年として生きているのだ。十六歳の高校生が一人で背負うには、あまりに重い現実。私の知らないところで苦悩を重ねたに違いない。

だから、あの少年が二度と『この町に』戻ってこないことだつて考えられる。

それでもいい。彼が八坂洋一の人生を全うしても、誰も責めたりしない。勝手に賽を投げたのは私なのだから。

(でも、きっとあの少年は帰ってくる)

スタジアムで会った彼は、どこか自分に責任を感じているようだった。時間はかかるだろうが、おそらく過去と向き合うために戻ってくるだろう。逃げてもいいのに、見なくてもいいのに、結局割り切れなくて、立ち戻ってしまう。

それでもいい。彼が雨城結太の過去と向き合うのは、誰にも止められない。その時事実を伝えるのは、私の役割だ。

(ゆっくり考えてもいいんだよ。君の居場所は、そこにもあるんだから)

カーテンを開ける。視界に秋の空が広がる。ベランダに出た私の頬を、かすかな潮風がくすぐった。

晴れていて、けれど心地よい涼しさ。

一年のうちでも好きな季節。

眠る子供を部屋に残して、しばらく外の世界を眺めていた。

遠い町にある学校の騒動を知ったのは、その日の夜。

パソコンのニュース画面を開いた私に偶然飛び込んできた、ひとつの記事。それは、とある高校の生徒が自殺したという内容のものだ。

つい先刻開かれた、学校関係者による会見。いじめを受けていたという噂。遺書の有無……何より私の目を引いたのが高校名だった。

「……どうやら、君のいる『世界』も大変なことになっているようね」

私がつい先日訪れた町にあった高校の名前。

そこには、あの少年も制服を着て通っているはずだった。

25 決意1

＊「決意」

——降りしきる秋の長雨。僕は部屋のカーテンを開き、窓辺に張り付いた水滴をじっと見つめていた。

前日の天気予報からわかっていたことだ。十月二十五日、日中の降水確率は八十パーセント。いや、雲の動きをみれば、誰だって傘を用意するだろう。

灰色の空を観察しながら、僕は深く椅子にもたれかかった。

目をつむり、部屋に漂う沈黙に身を預ける。小気味良い音色が、耳を打つ。

疲れた。

何もしたくない。

現実から逃げだしたい。

ほんの少し前でいい。

誰か、時間を過去に戻してほしい。

知らないうちに時は流れて、後には悔いだけが積み重なっていく。あの時こうしていればよかった。けれど振り返った時には、もう後戻りする道なんてない。今ならその分岐点に気づけるはずなのに、誤ったルートを選んだと知るのは決まって分岐点を通り過ぎた後なのだ。

過去を変えることはできない。言わなくても当たり前のことだ。だからこそ……悔しくて言っているんだ。

「……携帯」

初期設定のまま変えていない単調な振動音。僕は手を伸ばし、画面を開いた。

番号とともに、電話帳に登録された人の名前。あまり連絡を取らない人からの電話だった。

僕は決定ボタンを押した。

「はい、もしもし」

「起きてる？」

「ええ。もう九時ですから」

「やっぱ早いね、あたし今起きたばかりなのに」

「休みの日でも起きる時間は同じです」

「うん、そうだと思ったよ」

はつきりとした声。電話越しに話するのは初めてだったが、聞き取りづらいとは感じない。

「まあなんだ、その。学校では色々あったけど、元気？」

声の主はそう語りかけた。

「まあなんとか」

「なんとかかって……微妙な表現ね。はつきりしないっていうか」

「じゃあ大丈夫です」

「おいおい」

「僕に関してはあまり心配しなくてもいいですよ。違うクラスのことなので、あんまり事情もわからなくて」

「ウチの学校、伝統的にクラス同士のつながりって薄いもんね」

「それでもさすがにシヨックでしたけど。ただそれは、みんな同じことだと思えます」

「まあね、あたしもこの騒ぎにやほとほと疲れてるよ。最近はやく収まったみたいだけどさ」

「あれから二十日経ちましたね」

「……そうだね」

電話の声が低く沈む。

意を決して僕は言った。

「大槻とは中学時代に少しだけ話をしたことがあるんです」

「本当？」

「ほんのわずかな間だけでしたけど。中学三年の時だけ同じクラスで、テストの勉強を教えてました」

「そうだったんだ」

「高校に入ってからでは違うクラスに分かれたので、二・三回あいさつしたくらいですね」

「八坂」今度は切羽詰まったような声だった。「その大槻って子のこと、知ってるんだね」

「ええ、まあそうですね」

「じゃあさ、明日の月曜日、昼休みに生徒会室まで来てくれないかな？」

「生徒会室に、僕が、ですか？」

「そう。あんたに伝えたい話があるの。電話代がかかるくらい長いから、ここでは言わないでよね」

「はあ」

「……あ！別にこれ何かのフラグとかじゃないからね！？」

「ふらぐ……旗？あの、何を言ってるんですか？」

「いや……、わからないなら別にいいんだ」電話の向こうで一度咳払いをして「とにかく、用件はそれだけだから。じゃね、また明日」回線の切れる音に、電話を耳から離す。

（大槻の話かな？）

首を傾げながら、僕は再び空模様を見やった。

おおつきりょうた
大槻亮太。

僕と同じ高校の同学年で、違うクラスに居た少年。体格は小さく、どこか不器用な雰囲気をもっていたのを覚えている。

その大槻が自殺したのは、十月四日の夜だ。

持田とライブを見に行っていた同時刻に、彼の死体が浴槽で発見された。死因は失血死。うわさによれば、手首を動脈まで深く切りつけ、そのまま体温と同じ湯船に手を浸していたらしい。そばには血液の凝固作用を止める錠剤が散らばっていたという。

警察は大槻の死に関して、他殺の可能性は皆無だったと発表。学

校側も何度か記者会見を行っている。

自殺の理由はいったい何だろうか……生徒たちの間で噂となっているのは、数名の生徒たちによるいじめだ。目撃者は絶えない。中には大柄な少年に殴られる大槻の姿を目撃したと証言する生徒もいる。ただ、大槻のクラスメートたちはみな口を閉ざしている。

どの証言が本当かは僕にもわからない。情報が錯綜していて、どれもが物的証拠に欠けているのだ。

しかも大槻は遺書を残していなかった。学校側の調査——彼の部屋、教室の机、はては鍵をこじ開けたロッカーの中——もむなく、今のところ彼の思いを残す手がかりは発見されていない。

（醜いアヒルの子……か）

日常の近いところで起きた人の死。

僕はそこに言い知れない不快感を抱いていた。

26 決意2

翌日の昼、僕は真つ先に購買のパンを買い付けて生徒会室へと向かった。白いビニール袋の中には、紙パックのカフェオレと焼きそばパン。濃い味の焼きそばパンは昔の頃の好物だ。

ドアノックして、中へ。

室内は暗く、カーテンも締め切っている。

「あれ、いないのかな……？」

生徒会委員も休んでいるらしく、中に人の気配もない。ひとまず明かりをつけようと、扉の中に入ろうとして、

「わっつー!!」

びくつ、と心臓が跳ね上がった。

突然両肩を強く叩かれて思わず変な声が出てしまう。

「……」

「……」

「……」

「……あっははは!」

数秒後、うしろで弾けるような笑みが起こった。

振り向くと、腹を抱えて崩れそうな先輩がそこにいた。

お前か。

「……やめてくださいよ、若菜さん」

「ぶ、ご、ごめん。ちょっと脅かそうとしただけ……あー、リアク

シヨン凄すぎだよあんた」

僕はコミュニケーションを完全拒否し、目の前の女子を露骨に睨み続けた。

無言の沈黙。

「……あら、あまり女の子をじろじろ見るもんじゃありませんよ」

「さて、帰るか」

「悪かった、謝るって！」若干の困惑をあらわしながら「ほんとーにごめん。いやゝ実は今日返ってきたテストの成績がものすごく良かったもんでさあ、つい浮かれちゃったんだ。反省してる」

「あの、そんなことはどうでもいいですから、話は？」

「……ごめん、まだ怒ってる？」

「で、話は？」

怒ると怖いよねー、と前置きして……若菜の顔つきは変わった。スイッチが入った。

彼女の放つ雰囲気、僕は一気に身を引き締める。

「大槻亮太って子、知ってるよね？」

その通る声を駆使し、若菜は告げた。

「中学三年の時、一度だけ同じクラスでした」

「うん。その子のことなんだけど、聞きたいことが一つだけあるの。何のことか、僕はもう一度窺った。

若菜はしばらく目を伏せ、やがて意を決したように、言葉を継いだ。

「……大槻亮太の遺書について、ね」

（……あいつの、遺書！？）

僕に対して話すことは、生徒会室に来る前からおおかた推測していた。

二年生の若菜と一年の僕ではあまり接点がない。男子と女子、先輩と後輩。接点があるとすれば、二人とも前世の記憶を持つくらい。

それも、生活面においては何のつながりにもならない。互いのアドレスを知る以外に、この人と接する機会は殆どなかった。

時期も考えた上で、判断したのは、最近自殺した大槻に関する事柄。

僕は少しばかり彼と面識があつたし、若菜もおそらく興味本位で僕から話を聞くものだと思っていた。

だが、結果は違った。

「大槻が……！？」

「あくまで可能性の話」

僕の驚愕に、若菜はそう諭す。

「でもそれって、大槻が遺書を書いたかもしれないってことですよね？ いったい……一体その話はどこで？」

「学校に来た刑事さんたちの話をたまたま耳にしてね」とん、と人差し指でこめかみを叩く。「生徒たちの中で知っているのは、あたしも含めてあまりいないでしょうね。あと、このことを人に話すのは八坂が初めて」

「なぜそれを僕に？」

「君が口の軽い男じゃないと思っているから」

若菜は僕を見据える。

「買いかぶりすぎですよ」

「そう？ あたしには約束をちゃんと守るまじめな子に見えるけど首をわずかに傾げながら」ともかく、他言しないって、約束してほしいの。大槻って子の知り合いもほかに見当たらないし……。お願い」

特に含むところのない懇願。

僕がうなずくと、若菜はうつすらと笑みを浮かべた。

「刑事さんの話だと、その子が遺書を書いたのはテスト前らしいわ」扉を閉め切って音を遮断した室内に、若菜の声が響く。

「気づいたのは図書室の司書……監督の先生のことね。なんでもテ

ストの前日に、その子が学校の図書室で紙に何か書いていたらしいの」

「メモ、ですか？」

「ええ、最初は先生も他の生徒と同じテスト勉強だと思っていたのでも、下校時刻が来ても、その子は一人になるまでずっと書いていた。それって、変だよな。横の参考書には目もくれずに、紙にずっと向かい合ってたんだから」

「その先生は中身を見たんですか？」

「先生の目に気づいて、慌てて紙を隠したらしいわ。その後は参考書を元の戸棚に戻しに行ってから帰ったんだって」

「図書室にこもってのテスト勉強に見えて、何かを一心不乱に書いていた。そして、隠すそぶりを見せた……」

「どこかで紙を捨てた可能性もある。でも、そんなに苦心して、自分の字で書き上げたものを、すぐに捨てるっていうのも考えにくいし……」

「警察の家宅搜索では確か、遺書らしきものは見つかっていないそうですね」

「そう。だから妙な」言葉を被せるように若菜は言う。「紙を捨てずに、どこかに隠しているとするなら、きっと警察の調べで見つかるはず。逆に紙を捨てたとしたら、その子がずっと何かを書いていたことの意味がわからない。じっくりこないのよね。なんだか」「他人に渡したり、こっそりどこかに置いていたり……可能性はいくらでも見つかりますよ」

「じゃあ、八坂の考えは？」

「僕、ですか？」

「あたしが八坂を呼んだのはね、もしかしたらその紙のことを知ってるかもって思ったからなの」

「若菜さんに聞くまで知りませんでした」

「うん、でも呼びつけた理由はもう一つ。あたしじゃ全然考えがまとまらなくてさ。それで頭いい子の知恵が必要かなーって」

「僕、そんなに頭が良くないですよ」

「うそつけ。テスト全教科九十越えのくせして」

「数学は八十七ですよ」

「一般人からすればそれだけありや充分！」

びしつと指を突き付けられた。

「……まあ自分でさつき言いましたけど、他人に預ける可能性はおそらくないと思います。学校で孤立していた大槻には仲がいい生徒なんていませんでしたし、第三者が渡された紙を隠す意味もありませんし……」

「むー、その第三者が捨てたらおしまいだね」

「遺書が今もある、という仮定で話を進めましょう」僕はそう促した。「遺書が失われた可能性を考えるのではなくて、『大槻の残した紙がどこにあるか』に絞って考えた方が効率的です」

27 決意3

九月二十三日、つまり期末テスト前日のことだ。僕にとっても、前世の記憶がよみがえった日のことだから、今もよく覚えている。

僕はその日、持田にテスト対策の指導を行っていた。同じ日、同じ場所で、大槻は机に向かい、紙に何かを書いていた。彼はおそらくプリントの裏に文字を書いていた。数式ではなく、文章を。

閉館時刻になり、先生が大槻の様子を伺おうと近づく。大槻は急いで紙を懐にしまいこみ、元の棚に図書を返してそのまま下校した。テストが終わり、学校が再開する前日に大槻は自殺。大槻の死に第三者が関与した可能性もなかったが、遺書は見つからず。結局、テスト前日に書いていた紙の行方は、誰も知らない。

「学校と家を往復する毎日だったそうね」昼食のメロンパンをほおばりながら若菜が言った。「寄り道もしてただろうけど、なにせ一人で帰ってたみたいだし。せいぜい本屋とかコンビニくらいだろうね。まあ、そんな所に遺書を隠したわけじゃないでしょうけど」

「一番考えられるのは、学校かもしれませんよ」

僕はそう言っただけで焼きたパンにかじりつく。口に含んだまま、

「たとえば、図書室を去ってから、校門を出るまでの間とか。目を盗んでどこかに立ち寄ったり」

「学校の搜索は行われたけど、めばしいものは見つからなかったみたいよ」

「それとは別の場所です」遮るように言った。「一見あいつとは無関係に見える場所。パソコン室のキーボードの下とか、化学講義室の机の中だったり。そういうところってあまり掃除されたりしませんよね。だから中々見つかりにくい」

「うーん、それって何の意味があるの？」

「言い方は悪いですが、おそらく『効果的な演出』でしょう」

自殺による騒動が収まりかけた頃に遺書が見つかることで、大槻の死に新たな意味が与えられ、なおかつ世間に与える影響が大きくなる。もちろん推測の域を出ない。

そもそもの問い、遺書は確実に存在するのだろうか？

「ねえ八坂、遺書を残さずに死ぬってこと、あると思う？」

若菜の問いかけに、僕は首を横に振った。

「どうして」

「何の理由も示さないで自殺することが妙だから、です……あくまで大槻の場合ですが」

「……もう一つ聞いわ。いじめの噂、あれは本当だったね？」

僕はうなずいた。

学校の噂話には疎い僕だが、それでも級長を務めているので、クラスの動きくらいは何となく把握している。ただ、クラス同士の交流が個人レベルにとどまっているので、他クラスへの接点が薄い僕には詳細が分からないというだけだ。

その程度の情報収集力でも、僕の耳に大槻の噂は伝わっていた。

「じゃあなおさらね。いじめられて死ぬようなら、その人たちへの告発があつていいはずだと思うわ」

「すると、遺書じゃなくて……告発文？」

「あたしだったら、自分の主張を何一つ残さないまま死ねないわよ。だって、他人の都合でいいように死を解釈されるかもしれない。そんな恐れだってある。遺書を残しているとあたしなりに思ったのはそこなんだよね。根拠なんてないけど」

遺書は書き残した。

けれど、それを悪意ある誰かに握りつぶされないように、あえて隠した。時間が経って発見されるように、何らかの細工を施して。

これも、推測だ。

「若菜さんは大槻のことをどう思ってるんですか？」

ふと僕は尋ねた。

「理解できない」即答した。「自分の命を投げ捨てるようなやつも、そこまでいじめ続けるような輩も、どっちもあたしには理解できないよ」

「それは、どうして？」

「だって、命って……そんなに軽いものじゃないでしょ？」

『雨城』として問いかけた僕に、若菜は答える。

「病気で苦しみながら、どうしても治らなくて、満足に生きられなくて死んでしまう人だっている。なのに、こんな簡単に命を放り投げる奴もいる。あたしにはわからないよ。あたしは死ぬことの恐ろしさを身に覚えてる。病気の恐ろしさもね。だから、その子のこととは、命の冒涇にしか見えないの。たとえどんなにまっとうな理屈を並びたてたとしても」

口調にかすかな怒りを含んでいた。

「……いじめられる人の気持ちかわからないあたしだから、こんなこと平気で言えるのかもね。ごめん、八坂には関係ない話だったね」

授業五分前のチャイムがスピーカーから流れた。

「つと、もう授業か」顔を上げて「そろそろお開きにしようか。まあなんだ……あるかわからん遺書の話でほとんど昼休み潰れたようなものだけど」

「いえ、興味深い話でしたよ」

「そういうお世辞はいいって」若菜は苦笑した。「何となく思いついただけの話だから。八坂も、あんまり気にしなくたっていいよ。ここであれこれ考えても、結局は堂々巡りってヤツ。時間の無駄なんだから」

そう言って生徒会室の扉に手をかけたところで、ふと立ち止まる。

「……あれ、それってあたしが言っちゃダメだよな？」

それから午後の授業を終えるまで、教師の声は僕の耳に届かなかった。

遺書の存在。昼休みでの若菜の話が頭に残っていた。大槻はどこにも意思を示さずに、自ら命を絶った。最初は大きな渦となって、学校を騒ぎに巻き込んだ。僕たちは日々警察からもたらされる情報に踊らされて、様々な憶測が飛び交っていた。

そして今。

大槻の死は、うやむやになっている。

同じ日々が繰り返されようとしている。

一人の生徒が自殺したのに、何事もなかったかのように過ぎていく。

それは仕方がないのかもしれない。時間を経て忘れられていくのは当然であり、ごく自然なことだ。実際に、十六年前に起きた殺人事件なんて、ほとんどの人は忘れているだろう。

それでも、何かがいけない。

何か大事なことを、僕たちは忘れようとしている。この事件をもっと心に留めておかないと、『それ』は見えてこないと思う。でも、僕たちはそれを無意識のうちに見過そうとしている。

大切なことを、置き忘れている。

目を、逸らそうとしている。

ふと視線を辺りにやると、そこには怠惰な授業風景があった。

ある男子生徒は舟を漕ぎ、別の女子は何かの雑誌を読みふけている。数名の生徒は、教室の後ろに固まってささやき合っている。

平穏な日常が、また顔をのぞかせている。

僕はそこに言いようのない薄気味悪さを覚えた。

28 決意4

放課後になり、教室から生徒が離れていく。グラウンドでは既に運動部の練習が始まっていた。

「帰らねえの？」持田が僕に聞いた。

「ごめん、ちよつとね」

「学校に用事でもあるの？」

「図書室に行こうかと思って」僕がそういうと、持田の顔つきが変わった。

「図書室だと？ 俺は行かねえぞ。あそこには地獄しかねえ」

「なんでだよ」

「こないだのテスト勉強でいい思い出がねえんだよ！」

「はは、そりゃ残念だな」

「とにかく、行くなら一人で行ってくれ！ 俺はもう帰るぞ！」

「わかったって。ばいばい」

教室を出たところで別れる。

薄汚れた廊下を足早に歩く。あたりは少し肌寒く感じた。

(……もう十月も終わるか)

窓の外に広がる町並みは、夕日を浴びてすっかり秋の色に染まっていた。僕もまた、制服の下に薄いセーターを着こんでいる。グレイのセーター。学校指定のものだが、シックな色合いが僕のお気に入りだった。

渡り廊下を進み、やがては別棟に行きつく。校舎から独立してきた建物、県内随一の蔵書を誇る図書館が姿を現した。

(うちの学校って確か、大学の学術論文から児童向けの童話まで揃えているんだよな。ていうか、体育館並みに広い三階建ての図書室

つてほかの高校にないよな……)

図書室のドアを慎重に開ける。音を立てないよう、滑るように入る。

室内はがらんだった。

開いてはいたが、テスト期間と比べてずっと生徒の数が少ない。机は空席が目立ち、椅子も整然と並んでいる。かえって清々しくさえある。ずいぶん景色が変わるものだ、と僕は半ば感心した。

(テスト明けすぐに図書室に来る人つてもそうはいないか)

かく言う僕もまた、たまにしか訪れない。日ごろの復習は家で済ましているし、読みたい本があるときにここを利用してはいるにすぎない。とはいえ、町の図書館と比べて返却待ちが少ないのは利点だなにしろ学校図書館を利用できるのは、この学校の関係者だけに限られる。それは、人気シリーズの最新刊でもすぐに読めるということの意味する。

僕はある席を探していた。それは若菜の話を聞いて、ふと思い立ったことだった。

(どうやらこの席らしいな)

机は図書室のカウンターに背を向けた位置にあった。仕切りが設けてあるが、若菜の言うとおり、確かに司書から見えやすい場所だった。

この場所に、大槻は腰かけていた。

僕は机に向かった。

そうしてしばらく、目の前の景色を眺めていた。

……昔、何かのドラマで見たことがある。主人公の女刑事には死体現場に寝転がって、殺害された被害者と同じ視点に立つという奇妙な習慣があった。被害者が最後に見た景色を同じ位置から見つめることで、解決の糸口を探るのだという。

新たな視座で物事を見つめなおし、その本質を見抜く。

一方からは見えにくい謎も、別の視点から見れば、案外簡単に解けるかもしれない。ドラマの受け売り。それでも僕は、大槻のいた席に座ることにした。

テストを挟んでいるとはいえ、自殺直前に彼はここで何かを書いていた。

人に見られたくないものを、だ。

確かに座ってみるとわかる。座る側にとっては、前方の三面に仕切りがあるので、後方だけに注意しなくてはならない。それこそ、授業中に教室の中で漫画を読むのに比べてずっと難易度が低いことだ。多少おかしなそぶりを見せたとしても、誰かに悟られることはあまりないだろう――

(……待て)

――なぜ、ここである必要がある？

仮に紙が遺書だとするのなら、なぜ大槻は人目のある図書室で書いていたのだろう？

そうだ。おかしいのはそこだ。僕なら家で、自分の部屋にこもって密かに書く。なのに大槻は、この場所を選んだ。何故だ。

そこでなければならなかったから？

わからない。

だがこれは致命的な矛盾だ。

やはり紙は失われたと考えるべきなのか。

固執するまでもないことだったのか。

(……やはり、遺書は存在しないのか……？)

僕は見誤っていたのだろうか。

思い違いをしていたというのか。

これまで『遺書がない』という根拠が出なかったから、消極的な意味ではあるが、紙は存在すると考えていたのだ。だが、たった今、その根拠が頭に浮かんでしまった。『わざわざ遺書を人目のある図書室で書く意味はない』。それだけで、充分だった。

遺書なんてものは、存在しなかった。

雨城と同じだ。自分の気持ちを誰かに知られたくない、心に隠していたい、きつとそんな気持ちが働いたのだ。人を殺した理由が、ひどく自分勝手なものだったから、あの時の俺は誰にも言えなかった。俺には、遺書を書くだけの余裕もなかったのだ。

(……違う。大槻と俺とでは、事情が違う)

身の破滅を招いた俺と違って、大槻には何の落ち度もなかった。そこが、決定的に異なる。

(大槻、教えてくれ。何で自殺なんて方法を選んだ？　なんで、その理由を教えてくれないんだ？　何か言うことなかったのかよ……？)

あまりにも、報われない。

理由を教えてくれないから、その口で言ってくれないから、何もわからないというのに。

これは他人事で済ましていいものじゃない。

でないと、同じ日常に埋もれて、忘れ去ってしまう。それじゃ駄目だ。何かが駄目なんだ。

(なんで……醜いアヒルのままで死ぬんだよ……)

拳を固く握りしめたまま、時間だけが過ぎていく。

29 決意5

帰ろう——ほとんど聞こえないような声を発し、僕はおもむろに立ち上がった。

ここにいてもしょうがない。

手がかりがない以上、どうしようもないのだ。警察の捜査も終わっている。大槻の事件は、これから隠されていくように、忘れ去られるのだろう。何の影響も与えずに。

そうして日々はまた戻ってくる。彼の死を、覆い隠すように。

終礼からかなりの時間が経っていた。加えて部活動の生徒はまだ練習の最中だ。この時間帯、駅に向かう生徒は僕だけだった。

通りをまっすぐ歩いて、駅前へ。改札から人が吐き出されるのを見て、僕は電車に乗り遅れたのかと焦る。しかし、駅から出てきたのは反対方向の電車だった。

足取りを緩め、ゆっくりとホームに向かうことにした。

「おい」

階段口で呼び止められる。振り向いた僕の目に、若菜の姿が映る。

「あれ、部活は？」

「うちの部は今日休み」

「それでも結構遅くないですか」

「日直の仕事だよ」

僕は合点がいった。

「八坂は？」

「図書室で少し勉強を」

「うえ、マジか」

「しようかと思いましたが、やっぱり途中で帰ることにしました」「なーんだ」可笑しそうに齒をのぞかせた。「やめとけやめとけ。」

勉強なんてテスト前で充分。地獄を見るのはその時だけでいいのよ」

「僕の友達にも同じようなことを言われました」

「それが普通だって。勉強なんてやりすぎると頭がおかしくなるの」

「そう、かなあ……」

「あんた一年でしょ？ 受験期じゃないんだからテスト明けくらい遊びなさいよ」

若菜はあきれたように言う。

線路にかすかな振動が伝わる。しばらくして、明りを灯した筐体がゆっくりと現れた。

速度を落とし、僕の目の前で口を開く。

「ふいゝ、電車の中あったかい」

「寒くなりましたもんね」

割と席の空いた先頭車両。僕はそばの扉にもたれかかった。

「その席、空いてるけど座らないの？」シートに腰かけた若菜が疑問を吐いた。

「何となく……座る気分じゃないので」

「あはは、なにそれ」

若菜はあまり気にしない様子で携帯を開いた。

空間がゆっくりと傾き、体にわずかな負荷がかかる。

加速度的に景色は流れ始める。軽い振動と共に、轍を踏む心地よい音。最初のアナウンスがすぐにスピーカーを伝った。

「図書室に行っていたのは」ふと僕は口を開いた。「大槻の座っていた席に、座るためだったんです」

「……うん」

「うまくいえないですけど、同じ位置に立って、あいつと同じものを見てみようと思ったんです。そうしたら、何かわかるんじゃないかって。でも、わからないことばかり浮かんて、やっぱり挫折しました」

「八坂はさ」若菜が答える。「大槻をどう思ってる？」

「友達とは、言えなかったかもしれない」

「顔見知り？」

「だったでしょうね。でも今は、あいつの真意を知りたいって思うんです」

「自殺した理由……？」

向かい側の扉が開く。席に体を預ける彼女に背を向け、僕は頷いた。

「でも、今更でしょうね」頭の中に溜めていた言葉を紡ぐ。「もう、あいつが死ぬ前に……分岐点の前に戻ることはできないんですから」分岐点はどこにあったのだろう。

大槻の自殺を食い止める手段は確かにあったはずだ。兆候はあった。学校で孤立していた事実、たびたび無断欠席を続けていた事実。そこで誰かが彼を支えていれば、違う道をたどっていたかもしれない。

けれど、そうはならなかった。

誰もが、その兆候から目を逸らしていた。いじめはなかった。生徒たちはみんな友達がいる。無断欠席は生徒の怠惰。現実に蓋をし、何事もなかったかのように、僕らは平穏な日常を築いていた。

その果てに、最悪の結末は起きた。

「八坂の言う、分岐点って、どこにあったの？」

若菜の声が背を叩いた。

僕に向き直っているのだと直感した。

「ねえ、八坂、あんたは思いつめすぎだよ。こう言うのも嫌だけど、もう済んでしまったことなんだから」

「……すみません」

「謝らなくていい」

言葉尻に、ほんのわずかな苛立ち。

さすがにこれ以上は呆れられるか。そうだろうな。うじうじしている人を見ると誰だって腹が立つ。

でも……。

「中学三年の夏でした」

それは、独り言。

会話ではなく、僕の勝手な演説だった。

「大槻に、勉強を教えてくださいと頼まれたんです。テストも間近に迫った時期でした。それまで話したこともなかったクラスメートからいきなりそう言われたので、僕は少し戸惑いました」

視界の外にいる若菜は押し黙って聞いているようだった。

「しばらく考えて、僕は快く引き受けることにしました。クラスの級長を務める僕の性分からして、誰であろうと勉強に関する申し出は断られない。ともかくその時は軽い気持ちで応じたんです」

30 決意6

テスト勉強は図書室で行っていた。それも大槻の頼みだった。あまり人の寄らない場所にあったので、教室より静かに集中できるのだという。

「大槻は……頭が悪いわけではなかったのですが、とにかく不器用でした。テスト勉強を始めたころも、なかなか覚えが悪かった。それでも少しずつ、人と比べて遅くはありませんでしたが、テスト勉強は進んで行きました」

昼間は友達との付き合いが忙しく、大槻の手伝いをするのは決まって放課後だった。加えて級長として生徒の勉強を遅らせないという僕の自負も手伝っていた。そのため僕らは、下校時刻を迎えるまで図書室に残っていた。

そんなある日のことだった。

「少し生徒会の用事で遅れて来たとき、大槻が本を読んでいた。それは童話の本でした」

「中学の図書室に童話なんてあるの？」横から若菜は言った。

「アンデルセンの童話集です。たぶん、参考図書として置く学校もあると思いますよ」

「大槻はその本が好きだったのかな」

若菜の問いに僕はうなずいた。

「アンデルセンの童話、中でもあいつがよく読んでいた話は『醜いアヒルの子』でした。僕が来た時もちょうどそのページを開いていたので、今でも覚えています」

僕は大槻に尋ねた。大槻とはあまり話をしたことがなかったので、それに興味があることは意外だった。

「……卵から生まれたアヒルの子は、自らの容姿の醜さのために、

生まれた時からあちこちで仲間外れにされた。外に追い出されて、他の生き物からも暴力をふるわれ続けて。そうして冬が終わったころ、醜いアヒルの子は、清らかで美しい白鳥となった……僕も小さいころ好きな話だったので、しばらくその話をしていました。その時、あの話の真意を大槻から聞かれたんです」

僕はあの話を幸せな結末を迎える美談として捉えていた。仲間外れにされて、いじめられていた苦しみ、醜いアヒルの子を素直で美しい心をもった白鳥へと成長させた。アヒルの子は最後に大きな幸せをつかんだのだ。

「大槻の考えは違っていました。アヒルは成長するだけで誰からも認められる白鳥になれた。つまり、もともと結末は定まっていたのだと。あれは、童話の中だけのお話なのだと。そしてこうも言いましました。現実は大抵、白鳥になる前に死ぬんだ……と」

そんな解釈は正しくないと僕は言った。

「大槻の考えと、僕の読み方。どっちが正しいかは、その時の僕には考えるまでもなかった」

そしてテストの時が訪れた。

「……その子の結果は？」

「僕を上回りました」

素直におめでとうと言った。

僕を抜いて、クラスで一位だった。それはクラスで自慢できることだったし、それに恥じない努力を積んできたことも知っていた。

僕はその時素直に心からの賛辞を言った。

「でも、あいつはなぜか浮かない顔をしていました。一言だけ礼を告げて、あいつは自分の席に戻っていったんです……どうしてか、その時の僕には全くわかりませんでした」

若菜は顔を傾けて何かを考え込んでいる様子だった。

周囲に響き渡る、車内アナウンス。僕の降りる駅はまだ先にあった。

「本当は喜ぶことなんだよね」ぽつり、と若菜がつぶやく。「一生懸命がんばって、努力した結果なんだよね。でも、そうじゃなかった……」

僕はその答えを静かに待った。口で伝えるより、それが自然なことで考えたから。

本当に欲しかったのは、高い点数などではなかった。

「……もしかして」

若菜は眉をひそめた。

苦悶に満ちた表情のまま、顔を俯ける。

「ねえ、それってすごく……淋しいことだと思う」

「結局、あのころも今と変わらなかったんですよ」

僕は現実を語り始める。

「テストで高得点を残した大槻のことを気に掛ける生徒なんていませんでした。あいつは……いつもどおり、クラスで孤立したままだったんです」

何も、変わらなかった。

今なら痛いほどその気持ちがわかる。大槻が僕に勉強を頼んだ、本当の真意を。

「本当はテストの点数を上げたいからじゃなかったんです。それは……」

「友達が、欲しかったんだね」

僕が口をつくより先に、若菜の沈んだ声が耳を打った。

「だれでもよかった。話し相手が、欲しかったんじゃないかな。テスト勉強は口実で、ほんとうは、クラスで級長を務める優等生なら、

友達になれるかもしれないって、思ったの、かな……」

中学三年生。同じ学校に、三年も居続けている。教室内では既にグループが固まっていた。僕も一つの友達の輪の中にいた。大槻は、そこから外れていた。

あの時、大槻がいなくてもクラスは成り立っていた。

それは誰かを除け者にした平穏な日常。

僕と話を交わしても、それは結局、僕の所属するグループに入ったことにならない。テストというつながりが絶たればそれまで。

大槻にはどうすることもできない。

気づくべきは僕のほうだった。

孤立していた大槻に気付いて、支えてやれば、きっと何かが変わっていた。

「僕はね、今ならわかるんですよ」軽く呼びかけるような口調で言った。「僕の前世も同じような人間でした。人づきあいが滅茶苦茶できなくて、いつも一人ぼっちでいるしかなくて、それでも誰かとつながっていたくて。今なら痛いほど、あいつの気持ちがよくわかるんです」

「……」

「あなたはそういう経験、したことがありますか？ 誰からも無視されて、のけ者にされて、居場所がなくて。そんな、みじめで笑われること……今の僕はあいつを嘲ることができません。あいつの不器用さを、馬鹿にすることは、したくないです」

喉に針を突き立てたような重い沈黙。

レールの接触音だけがリズムよく、空気を伝う。

三つ先の駅までそれは続いた。

「……、わからないよ」はっきりと、呟いた。「悪い、八坂。いじめには何度が遭遇してるんだけど、自分はいつものからかう側……いじめる側にいたからさ。そいつの気持ちはわかりっこない。だから

そいつにはやっぱり、命を投げ捨てた間抜けとしか思えないや」

飾りなく語った言葉。でもそれは、まぎれもない彼女の本心。

「……でも、嫌な話だよ」

ゆっくりと、景色が止まってゆく。

不意に若菜が立ち上がる。僕より先に降りるはずだった。

「最後にひとつ」僕に目をよこしながら、口を開いた。「大槻はさ、あの童話に自分を重ねていたのかな？」

「おそらくは……」

現実には童話のようにいかない。幸せな結末は、あくまで物語の中。だから大槻は僕の解釈を否定したのだろう。

どちらが正しいのか、今の僕にはわからない。

それまでの僕は、じつと耐えれば、何かに報われると思っていた。勉強だつてそうだ。逃げずに向き合えば、必ず結果がついてくる。

そう信じて、僕は『今』を築き上げた。

僕自身が作り上げた価値観。でもそれが、みんなにとって、普遍的に正しいとは限らない。

大槻は、報われなかった。

童話と現実が違う。

あの時大槻が言った言葉の意味を、その時の僕は全く理解できなかった。

今なら、わかる。

でも、もう遅い。

大槻の真意が理解できたというのに、もう分岐点は過ぎている。

——真意？

扉が開く。

僕に挨拶をかわし、若菜は席を離れた。

そうして吸い出されるようにホームへ降り立つ。入れ替わるように、かすかな冷気が頬を撫でる。

警笛の音。僕は彼女の背中をゆっくりと見送って、

外へ駆けた。

31 決意7

「え……！？」振り返った若菜は呆然とする。下りるはずのない駅で僕が降りたこと。急な動作でホームに飛び出したこと。唐突な行動に、彼女は戸惑いを隠せない。

「ど、どうしたの急に？」

「……ありうる」

「八坂？」

「いや、うちの学校のことだ。きつと、あるかもしれない……」

ぶつ切れの思いを言葉に載せる。傍から見れば不審者だろう。だがそんなことも気にならない。

パズルが次々と埋まり、最後の詰めが見えたような感覚。形容するのなら、それは閃きだった。閃きが、すでに僕を支配していた。

背後で電車の扉が閉まる。そうして、レールの先へ去っていく。

あとには僕たちだけが残される。

そうだ。

あるとするなら、きつとそこだ。

「あるとするなら、あそこしかない……！」

ほどよく向こう側から電車がやってくる。学校方面への電車。僕は再度鞆を肩にかけなおし、言葉を失ったままの若菜に振り返った。
「ちよつと今から学校に戻ってきます」

「あ、あの……？」

「それじゃあ」

「ま、待つて！ あんた急にどうしたのさ！？」強く肩を掴んで「さつきからわけがわかんないよ。何なのか教えて」

一度息を整えて、僕は言った。

「……遺書のありかがわかったんです」

道をたどり、学校へ足早に向かう。すでに下校時刻を迎えようとしていた。若菜も僕の後に続く。

「あるとしたら図書室なんです」僕は言った。「テスト前日、大槻は図書室に残っていました。下校時刻を迎えて、ようやく書き上げた。そのあと参考図書に戻すときに、遺書を隠したんです。それなら遺書が大槻の机やロッカーになかったことの説明がつく。ましてや、家になんてあるはずがない」

「どうして家で書かなかったの？」

「家で書いたら学校に持って行く必要があるんです。でも、持ってこようとすれば、必ず鞆に入れなくちゃならない」打ち消すように言った。「そうすればあいつをいじめる奴らが勝手に中身をあさって見つかるかもしれない。朝持ってきたとしても、図書室が開放されるのは放課後になってから。それまでどこに持っていようと人目につく可能性があったんです」

「じゃあ学校で書くしかなかったってわけだ。書いてすぐ……隠せるように」

「おそらく時間ギリギリの状況でした。なぜなら、その時はテスト期間だったから。試験日になれば、テスト明けまでしばらく図書館が開かないのは若菜さんも知っているでしょう。大槻は、テスト期間という、特別な時期を自殺に利用したかった。効果的な演出を狙って」

「リミットがテスト前日……期間が空けば、自殺の決意が鈍るかもしれないと思ったのね」

「そして遺書を書いて隠したことで、途中でやめるという選択はできなくなった。いわば、あいつは自分で退路を断ったんです」

「八坂、遺書を学校の図書室で書いたのは何で？」

「……細工をするために適した場所だったからです。世間的な影響を考えて、自殺してすぐ遺書が見つければ、騒がれるのはその一時期だけ。だから大槻は、遺書が見つかる時間を遅らせようと考えた。結果的にそれが図書室だっただけです」

「体育倉庫とか、ほかに隠す場所はいくらでも見つかるわ。その中から選んだのが図書室だったの？」

「隠す場所にも、意味があつたんです」

僕は立ち止まった。

図書室の照明は消え、図書委員らしき生徒がカギを閉めようとしている。僕たちの姿を見て、委員は戸惑いを見せる。

「……綾ちゃん？」

同学年の生徒なのか、委員の視線は若菜のほうに向いていた。

「高見、いきなりで悪いけど、図書室のカギをもう一度開けてもらえないかな？」

「え……？」

「五分だけでいい！ この通り」頭を勢いよく下げる。肩にかかっていた前髪が垂れる。「カギもあたしが職員室に返しておくから。中に入らせて！」

「あ、えつと……」

「僕からもお願いします！」懇願するように言った。「どうしても調べないといけない本があるんです」

図書委員を外で待たせ、その間僕たちが調べ物を済ませることになった。

静寂な空間を分け入る。目指すところは一か所。ラベルを丹念に調べ、僕たちは懸命にその本を探した。

県内の高校で随一の蔵書量を誇る図書館だ。中学にもあつたのだから、それより規模が違うこの場所にはいはずがない。

大槻もきつとその本を見つけていたはずだ。

「あつたよ、この棚だ」言つたのは若菜だった。「アンデルセン童話。外国版や全集って可能性もあるけど……おそらくここで間違いない」

僕は息を呑んだ。

「……本の中に遺書を隠したのね。確かに隠し場所としては適切ね。」

小学生向けの児童図書なんてまずほとんどの人が手に取らない。ただでさえ利用がこの学校の生徒と教師だけなんだから、すぐに見つけられる確率は限りなく低い、かな」

「時間差で遺書が見つかり、自分の死の影響をより大きくする。それに加えて……」

僕は静かにその本をつかんだ。

ゆっくりと抜き取ると、ページのどこかにしおりのようなものが見えた。

「発見者は、隠す本にも意味があると気づかされる」

『醜いアヒルの子』のページに、一枚の紙が挟まれていた。

32 決意8

紙は話の結末部、一番最後のページにあった。

それはどこにでもありそうなプリントだった。おそらく授業で配られたプリントを使ったのだろう。プリントには名前欄があり、そこには……『大槻亮太』と記されていた。

「……やっぱり」

僕は息を整え、静かにその紙を抜き取った。ページから離れたのは、三つ折のプリント。

大槻の真意がここにある。

「伝えないわけがなかったんだ」僕は呟いた。「僕に言った時と同じように、自分の好きだった童話を持ち込んで、伝えたかった。大槻はこういう形で、自分の気持ちを伝えようとしたんだ」

手に取ったまま、ふと、疑問が頭をよぎる。

「……それって、なんでだろう。自分の気持ちをうまく説明できないから？」

どうしてこんな回りくどい形で伝えようとした？

自分の境遇を人に話す手段がわからないから？

愚痴を言い合える仲の友達がいらないから？

辛さを人に打ち明けることを、知らないから？

どんなに苦しくても、一人でがんばろうとする。大丈夫だって言い張って。

でも、そんなことをすれば、いつか気持ちは切れる。

それさえも考えられなかった？

いつも一人ぼっちだから、人に頼ることを知らない。

だから、人に頼られない。
だから、一人になつてしまう。

不器用。

やり方が不器用だ。

あいつの生き方が、不器用だ。

もつとうまく立ち回ればいいのに。

それすらもできなかった。

痛々しいほどに、彼が不器用だっただけ。

「告発文だよ」若菜が言った。「回りくどい方法をとったのも、いじめていた奴らに仕返しをするための演出。あたしはそう思う」
返す言葉が浮かばない。

「開けてみよう？」

それでも、動けない。

「あたしたちに向けられたものなんだから」

脳が信号を発してから、ずいぶんと時間が経った。

僕の手が、ようやく動き出した。

プリントを伸ばし、僕たちは読み始めた。

——告発文などではなかった。

綴られていたのは、感謝。

大槻の人生に関わってきた、あらゆる人への感謝。

誰かに対する告発なんて、どこにもない。

最後まで、卑屈で、他人行儀。

僕へのお礼があつた。

いっしょに勉強してくれてありがとう。

でも、わかってくれたかな。

あの童話の解釈は、自分の方が正しかったこと――

「……なんで、だよ」

そこに大槻がいた。

その姿が目には浮かんた。

死んだはずなのに、そこにいた。

だから、僕は吐き捨てた。

「なんで、何も言ってくれないんだよ！」

目の前で作り笑いを浮かべる少年がそこにいた。

「なあ、どうして死んだんだよ、教えてくれよ？ 誰がお前をそこ

まで追いやったんだよ、おい……言ってくれなきゃわかんねえだろ！」

少年は何も語らない。

「違う！　こんなの絶対に間違ってる！！　なんでこんなキレイゴトしか言わねえんだよ！？　このままで終わるかよ！　もっと他に言いたい事なんてなかったのかよ？」

分岐点は遙か昔に通り過ぎてしまった。

「そんなことを言うために死んだんじゃないだろうが、この……大馬鹿野郎！！」

声を振り絞って放った言葉が虚空に消える。

現実はいくつも変わらない。

33 決意9

「こんなところでなにやってるんですか」

髪をゴムで束ねた女子に、僕は授業ノートを片手に声をかけた。
十二月にしてはやや気温が高い日の、生徒の声にわき立つ昼休み。
喧騒から離れた学校の屋上に、その人は一人でフェンスに寄りかか
つていた。

「ひなたぼっこだよ」

後ろ向きに答える。向こうも声の主が僕だとわかつての返事だろ
う。風に煽られないよう、僕は屋上の扉を静かに閉じた。

網の目に走るコンクリートを、その人の傍らにまで歩く。横顔が
見えた。彼女は、僕の見知った上級生だった。

「さっきまであそこに居たんですけど」そう言って僕は隣の図書館
を指す。「そうしたら、窓から姿が見えたので。何となく気になっ
て声をかけてみたんです」

「ふーん」

「あの……？」

「今日は一人でいたい気分です」ちら、と僕の方を見て「誰もよら
ない場所を見つけたつもりだったけど、案外見つかりやすいものね」
「それでこんなところに？」

「たまには一人でいるのも気楽かなって思ってた」

彼女はフェンスに背を預けて空を仰ぐ。

「今まで気づかなかったけど、誰にも顔を合わせたくない時は、こ
うしてのんびり過ごすのも悪くないわね」

「えっと、僕、邪魔ですか？」

「来る者拒まず、ってとこかな」

どこか遠くを見ているようだった。

僕は何も答えず、しばらくその場にとどまることにした。フェンスの外に、僕の住む町が大きく広がっている。冬の日の町の風景、立ち並ぶ建物、遠くに流れる川、空をかすめる雲の群れ、響き渡る飛行機の音。

「ひよつとして、考え事してます？」

沈黙を解いた僕に、若菜は振り向いた。

「ほんのわずかな顔の動きとか、目の動きで、そういう違いが見えるんですよ。なんていうか、若菜さんは一点をずっと見つめているんです。それで悩み事あるのかなって」

「……悩み事？」

きょとんと目を見開いていた若菜。

しばらくして吹き出した。

「あー、慣れないことはするもんじゃないねえ。あたしの頭じゃすぐ知恵熱出るしさ。うん、悩みっちゃ悩みさね」

「も、もしかしてそれって恋の悩み」

「あたし彼氏いないよー」遮られた。「……うう、なんだか言っていて寂しいなあ、これ……いや、どっかかというと、考え事だね。悩みというより、考え。あたし、どうしようかって考えてるの」

「……大槻の事ですか？」

若菜は小さくうなずいた。

—— 発見された大槻の遺書は世間に公表された。

見つけたのは事件と無関係な三年の生徒。遺書を発見したのは僕たちなのだが、自分の手で見つけたとあっては少々面倒なことになりかねない。全く関わらない形で、他人に発見させるようにしたのだ。

どこかの教室の黒板にそつと張り付けておけば、あとは誰かが見つけてくれるだろう。

そして実際その通りになった。

遺書は少しだけ世間を賑わせた。収束しつつあった事件に新たな

情報が入ったのだ。遺書は二セモノだと主張する人もいたけれど、筆跡を調べれば大槻の書いたものであることは明らかだった――

「あの遺書、いじめを証明する手がかりにはなりませんでしたよね」僕は言った。「自殺の理由なんてどこにも書かれていない。内容はあいつと関わった人へのお礼……あれ、『期待』していた人たちにはどう反応していいかわからなかったでしょうね」

一か月が経ち、すでにその騒ぎも収まっている。年の終わりに向けて準備を始めているのだ。自殺した一生徒のことに関心を払う人は皆無だった。

「大槻をいじめていた生徒の見当はついているんです。けど」けれど、決定的な証拠もなく、事を荒立てたくない学校側の対応もあって、全ては噂のまま終わった。

何かの折で、彼らと居合わせる機会があった。

彼らは楽しそうに笑っていた。

何事もなかったかのように、いつものように、楽しく。

「本当に、悔しかったです」僕は言った。「そいつらは自分のした事の意味をわかつちやいなかった。それどころか、もう忘れていくかのように、前と同じ生活を送っている。見ていて、齒がゆかった」大槻の死が、何の意味もなく忘れ去られていく現実。

彼が居た事実には蓋をして、また以前と同じ平穏な日常に戻ってしまつた現実。

変えられない。

一人の力では、何もできない。

「でもそれ以上に馬鹿だったのは……僕のほうでした」自嘲する。冷たい風が僕の頬に当たった。

「結局、僕は目を背けていただけだった。気づかないふりをして、あいつに声もかけなかった。あいつが死んでから、ようやくそのことに気づいたんです……」

無関係を装って、他人事だと思って、無関心でいて。

「でも、今も僕は怖いんです。そいつらを糾弾して、自分の立場が無くなるのが。標的にされるのが恐ろしくて、何も言えなくなつて……！」

今の日常が崩れるのを恐れて、波風を立てないことばかり考える。面倒なことは避ける。

自分は優等生というポジションに安住して、勉強という殻にこもつて、周りのことを見ようとも考えない。

結局僕は、その程度の人間なのだ。

「本当に、自分って弱いですね？」

何も変えられない、逃げるだけの、臆病な人間だ。

「後悔しても、遅いですよね……？」

生まれ変わった後も、その本質は微塵に変わっちゃいないんだ――

「それで、いいんだよ」

――若菜はおもむろに束ねていたゴムを外した。

風が舞い、胸ほどにかかる長い髪が広がる。深呼吸を、一つ。

振り返つて、呆然と立ち尽くすこちらを、まっすぐに向かい合う。

「あなたはそのことに気付いたの」口調にためらいはなかった。「

気づけたから、後悔できる。それってあたしからすれば、すごく偉い事だつて思える」

「……気休めはやめてください」

「違うよ、八坂」

遮るように若菜は言う。その目でしっかりと僕を見据えながら。

その目に、確かな意思を宿しながら。

「あなたは孤独な人の立場を知っている。一人ぼっちの気持ちがかかる。あたしなんかよりずっと、弱い立場の人のことを、深く理解

できる。そのあなたは、自分に対して後悔している。だから……あなたは、次に同じことを繰り返さなければいいの」

「……」

「確かに分岐点は通り過ぎたよ。過去は変えられないよ。でも、過去から学ぶことはできる。あなたが学んだことで、その子の死は無意味じゃなくなったの」

過去を悔いるだけじゃ、終わらないもの。

「その子の死が、あなたを気づかせたのよ。それだけは忘れないで忘れると、それこそ本当に無意味になってしまうわ」

僕だけに、できること。

34 決意10

過去を変えることはできない。

それでも、変えられるものがあるということ。

「あたしは、いじめられる人の気持ちなんて考えもしなかった」若菜は言った。「今もね、何となくにしかその辛さは想像できないかな。あたしには気持ちがわかるだなんてとても言えないよ。でもね、でも……」

胸に手を置いて、彼女は息を吐いた。

「……だからって、もうあたしは無関心じゃいけない。こんなことは二度と起きちゃいけないって、それだけは、あたしにもわかるから」

誰かを除け者にして成り立つ日常があった、ということ。

大槻を死に追いやった原因と無関係ではないということ。

「ねえ、八坂。あたしにもできることって、あるかな？」

唐突に若菜は問いかけた。

「その子には何の縁もないあたしだけどさ。でも、そういう立場だから、できることってあるはずなんだ。こんなくだらない状況をなくすために、できること。当事者だけで解決できなくっても、あたしのような関係ない人なら……うう、考えがまとまらないなあ」

難しい顔をして、考えるしぐさを見せた。

「……うん、きっとあるはずなんだ。いじめをなくすように呼びかけるとか……単純すぎるかな？」

朗らかな笑声が、冬の空に透き通る。

鼓膜には静寂だけが伝わる。

あらゆる雑音を遮断し、僕は言葉を失っていた。

「八坂。あたしは自分にできるかぎりのことをするよ。どんなにちっぽけでも、たとえその人たちが何も言わなくっても、その人たち

があたしを拒んでも……苦しんでいる人を支えてあげられるように、やってみるよ」

「……」

「あたしの決意は、そんなところ！」

ずっと、この人は考えつづけていた。

僕が失われたものに後悔して立ち止まっていた間、彼女はずっと前を向いていた。

何かを変えようと、強く願い続けながら。

(……はは、叶わないや……)

絶句した。

勉強ができることが正しい道だと信じていた僕には、決して見えなかったもの。それがこの人には見えている。頭がいいだけが全てじゃない。テストの答えにない、ひとつの決意^{こたえ}。

戦慄した。

同時に僕の中で、つまらない矜持が音を立てて崩れていく。

「……どうして」震える声で、僕は尋ねた。「どうして、そんなことを考えられるんですか」

含みのない、純粹な興味からの問いかけ。

「困っている人がいたら、放っておけないから、かな」

長い髪をかきあげながら、若菜はそう口ずさんだ。

「帰りの電車で八坂から大槻の話聞いて、そこから考え始めたの。困っている人が、まだまだ自分の見えないところにいるって」

「……」

「自分の力ではどうにもならない状況にいる人。辛い思いから抜け

出せない人。思うように心が動かない人……まあ頭は悪いほうだけど、そういう人たちの悩みを聞くくらいのは、あたしにもできると思う」

「……」

「だから、うん、まあ、とりあえず方向性は見えた感じ。八坂には感謝するよ」

「……」

「って、何か喋ってくれないと。さっきからあたしばかり真顔で恥ずかしいこと言ってるんですけど！」

自分にできることを精一杯やる。

それが、若菜の決意。

気付くと僕は、口元に笑みを浮かべていた。

「……きっと、若菜さんにならできますよ」

心に思ったままの、混じり気のない感情だった。

それは、誰にも真似できない道。

僕にも、何かできるだろうか。

大槻の死を無意味なものにしないためにも。

僕には、何ができるだろう。

彼女の覚悟を見て、何もしないわけにはいかない。

誰かの存在が、言葉が、小さな行動が、何かを変えられるとするなら。

僕にとって、まだやるべきことがあるとするなら。

それは。

もう、迷わない。

分岐点を違わない。

戻ること。

逃げずに、立ち向かうこと。

35 決意11

考えていただけでは、答えは見つからなかった。

迷いながら考えても、結論が出なかった。

なのに、若菜の話を聞いた僕は、既にその結論を導き出していた。答えなんて最初からなかったのだ。いや、はじめから答えは決まっていた。それを僕がためらっていただけのこと。それは、消去法で考えて答えが出るものじゃなかったのだ。

今、心の底から、何かをしたいという気持ちがある。

それだけで、迷いは消えた。

若菜には決意がある。

自分にできることを、しようとしている。

僕にもある。

触発されただけかもしれない。ほんの小さな覚悟かもしれないけれど、自分にもできることがある。

会いに行こう。

彼らに会って、もう一度向き合おう。

それが、僕の決意だ。

* * *

車を転がせない高校生にとって、伊浜町は遠い場所にあった。そのため、まとまった時間を取る必要があった。

授業そっこのけで出した結論は、冬休みを利用するということ。

つまり、出発日は十二月二十六日。

滞在期間は特に決めていないが、正月をまたいでも親はあまり気にしない。それに、長くて五日程度だろう。

費用は貯金を崩して工面する。普段からあまり金を使わないので、宿泊代も含めて事足りるほどの余裕があった。

計画を進める間も、迷いはなかった。

* * *

「ごちそうさま」

いつものように僕は母親にそう告げて、食器をテーブルから運び出す。後片付けは自分でやるのが八坂家のルールだった。

蛇口をひねり、スポンジを手に取る。傍に洗剤があった。

「あしたはいつ出発なの？」

「朝早く。始発の電車に乗るつもり」

「ええ！？……友達との旅行なんですよ。いくらなんでも早くない？」

「なるべく早く現地に行きたいからそう決めたんだよ」

偽らざる本心、しかし、半分は嘘をついていた。

「まあ、洋一なら大丈夫とは思うけど。明日は一人で起きてよ。お母さんそんな時間に朝ごはんの支度できないから」

「それも大丈夫。コンビニでおにぎりでも買って食べるから」

十六年間、変わらない八坂洋一の日常。

戻ってくる場所はどこにある。けれどしばらくの間、八坂洋一という人間はこの世から消える。家の扉を閉じた瞬間から、僕は『雨城結太』だ。

階段を上り、部屋に戻る。

机の上に、一冊のノートが出ていた。

授業で使うノートではない。家にいる間、自分の前世の記憶を書き留めたものだ。

なにしろ一生分の量だ。かなりの時間を要したが、これも出発前

までに何とか終わらせることができた。

「……これは持って行かない方がいいかな」
机の引き出しに、そっと仕舞い込む。

片隅に置いた携帯を開き、電話をかける。

「お、八坂」声は持田だった。

「持田。テスト前にした約束、覚えているかい？」

「おう、ばつちりだぜ！ 万が一お前の母ちゃんから電話が来てもちゃんと言われた通りの対応をするからよ」

「そうか。ありがとう」

僕は電話越しに頭を下げる。

母親には『何人かの友達（あえて持田とは言ってない）と伊浜町へ旅行に行く』と伝えていた。もちろんこれは嘘で、本当は僕の一入旅だ。けれどそれでは親が不安にかられるというもの。だから正直に言わないでいるつもりだった。

それに、町で親が持田と鉢合わせることもまずないだろう。この冬休みに溜まっていたゲームをするというので、彼は家からあまり出ないそうだ。

「でもお前、一人でどこへ行くんだ？」

「伊浜町ってところだよ。知り合いの家へ行こうと思ってる。親に内緒なのはまあ、いろいろ事情があってね」

「お前らしくないな。まあいいや、帰ったら土産でも送ってくれや」

「んー、ペナントとかキーホルダーとか？」

「そんなもんでも売ってるじゃねえかよ」

「はは、冗談だよ。そうだなあ、考えておくよ」

「できればうまい食いもんがいいな」

「わかったよ。じゃあな」

ボタンを押して、僕は息を吐いた。

（うーん、地域限定ラーメンとかにしておくか）

床に就いた僕は、しばらく目の前の天井を見つめていた。
街灯の光がカーテン越しにこぼれてわずかに部屋を照らす。車の
通り過ぎる乾いた音が、時折耳を打つ。

眠れそうにないと気づくまで、少し時間がかかった。

(……そりゃそうだよな)

ほぼ十七年ぶりの帰郷。『彼ら』との再会。気持ちが高ぶるのも
無理はない。

また帰る日が来るとは思ってもいなかった。

十七年前、崖の下を見つめていた俺は、もう二度と戻るまいと誓
っていた。

けれど、その自分は生まれ変わり、現実と向き合おうと誓った。
その意味で、渡会には感謝するべきだろう。思い出したのは、彼
女の力があってこそものだ。

(……そういえば、渡会さんも伊浜町に住んでいるんだよな)

渡会佳苗。

彼女を旅人と呼んだのは、どうしてだろう。

理由を少し考えて、『あの男』の存在に行き着いた。

おそらく、渡会は……。

(その渡会さんが連れてきた、僕と同じくらいの女の子がいたつけ
ライブの会場で会った『中条』と名乗る少女。

彼女もまた、伊浜町に住んでいるのだろう。

あの時は強い影を帯びた容姿に気を取られたが、おそらく間違い
はない。彼女は『あの男』の娘だ。

(……中条の娘か。何の因果だろうな……)

記憶の最も深い所に根差す、その名前。

生きていれば、きっとどこかで会うことになるはずだ。

やるべきことが、ある。

そこに迷いはなかった。

いつしか僕は眠りについていた。

十二月二十六日、午前五時。

駅のホームに人の姿はない。始発の電車が来るまで、中央のベンチからいつも見慣れた景色をしばらく眺めていた。

ホームの明かりに照らされて、吐息が白く濁る。ふと視線を向けると、レールの向こうが、かすかな光を帯びていた。

いつもは何気なく使う路線、通学に利用する電車。

今日は少しでも意味合いが違う。

日常を離れた、長い旅の始まりだった。

36 閑話

——シートに体を預けながら車窓の外に目を向けた。見慣れた町の景色はどこにも見当たらない。ガラスに手を近付けると、冬めいた空気がひんやりと伝わった。

車内は小刻みに揺れていた。直線に延びた線路を擦りながらの、旋律。単調なBGM。時たま流れる車内アナウンスに、眠りに就く数人の乗客。

僕は、本を読んでいた。

十七年前に刊行された本。

同時に、前世の僕が読もうとした本でもある。

読みかけのまま死んでしまったので、話の結末は知らない。ストーリーは粗く覚えていたが、しかし物語の進行状況は思い出せず……どこまで読んだのかを忘れてしまった僕は結局、最初から読み直すことにした。

生きているから、結末まで読める。

それは、八坂洋一という第二の生を与えられたからできることだった。

『長生き』は、してみるものだ。

僕は八坂洋一。とある小さな町の高校生で、先月十六歳の誕生日を迎えた、しがない一人の少年だ。

そう、これは紛れもない事実だ。身辺のどこをどう調査しても、その事実が揺るがない。しかし僕には、かつて名乗っていた名前がもう一つあった。生まれ変わる前の自分が、僕の中に存在したのだ。その名前は、雨城結太。

故人。

十七年前にとある事件を起こし、自殺した青年だった。その日々は、前世の記憶として僕の中に受け継がれている。雨城と八坂は同一の人間なのだ。

つまり僕は八坂であり、雨城でもある。

かつての自分、という表現がおそらく最も理解しやすいだろう。もっとも、それを説明できる人間はごくわずかに限られている。

渡会佳苗は、そのうちの一人だ。

ある意味ですべての発端となった女性。占い師であり、眠っていた前世の記憶を引き出した張本人だ。彼女は、これから僕が向かう伊浜町の住人でもある。

渡会には話すことがあった。彼女を探し出すのも、この旅の目的の一つだ。

彼女の手によって、僕が記憶を取り戻したのは、三か月前の九月下旬のこと。

確かに僕は雨城の存在を思い出した。

しかし同時に僕は、悩みを抱えるようになった。

まっとうな人生を歩んできたと自負していただけに、犯罪者である雨城を自分として受け入れたくはなかった。彼が自分じゃないと言えは嘘になるし、かといって僕が犯罪を起こしたわけでもない。己の分裂。今でも、自分が正しい人間なのか、わからないでいる。

そんな折に、あるコンサートの会場で僕は渡会と再会した。

影を宿す瞳が会う人を遠ざける、人嫌いの女の子を引き連れて。

その少女と会ったのは偶然だった。しかし、雨城のことを知るはずの渡会は僕に何も言わかった。それは彼女なりの配慮だったのかもしれない。

その代わり、渡会は僕に尋ねた。

かつての故郷へ帰るつもりなのか、と。

僕は答えに詰まった。

伊浜町へ行こうとすれば、それは雨城として戻ることになる。

けれど、僕には八坂としての居場所がある。

すべてを忘れ去るべきか、あるいは過去にもう一度立ち戻るか。

いくら考えても、迷いは残っていた。考えて答えを出そうとしても、その答えはずっと出なかった。

そのうちに、一人の少年が自殺した。

僕の通う学校の生徒で、僕とは中学時代にっしだけ話をしたことのある人物だった。原因はおそらく複数の生徒によるいじめ。もちろんこれは、周りの推測によるものだ。真偽を確かめるすべはない。彼の死を知った僕は、後悔の念に囚われていた。僕には彼の死を食い止める機会があった。しかし、その分岐点に、僕は気付かなかった。彼を支えてやるができなかった。

その僕が、彼の遺書を発見したのは、自殺から二十日経つてのこと。遺書の内容は、彼の人生に関わった人たちへの感謝。いじめていた生徒を告発するような文句はどこにもなかった。

僕はより深く苛まれた。自殺した生徒を忘れるかのように、うまく回っていく日常。いじめていた生徒が楽しそうに笑う光景。それ以上に、どうすることもできない自分自身への無力感。

何もできなかった。

一人の力では何も変えられない。

そんなある日、若菜という一人の上級生と話を交した。

彼女もまた、前世の記憶を取り戻した人間。そして、少年の死を深く知る『他人』でもあった。

彼女は、僕と違っていた。

僕が無力感到立ち尽くす間、彼女は、ずっと前を向いていた。

自分にもできることがあるか、若菜は僕に訊いた。

二度と繰り返さないように、苦しんでいる人を支えようという、彼女の強い決意。

僕はその時、心の底から湧き上がるものを感じた。

僕も、この人のように、何かをしたいという、純粹な思い。

それだけで、考えても出なかった答えが、一瞬で現れた。

それだけで、こびりついていていた迷いが、吹き飛んだ。

考えて結論を出すのではなく、ただ何かをしたいという気持ち。

答えは、最初から決まっていたのだ。

僕は過去に向かい合おうと決意した。

かつての僕が住んでいた町へ。

かつての僕が会っていた人に。

かつての僕が果たせなかった事を。

もう一度、立ち戻ろうと、決心した。

「まもなく、伊浜町、伊浜町。出口は、左側です」

最後のページを読み終え、静かに本を閉じた。

ふと、窓の外に目を向ける。どこか見慣れた景色が広がっていた。

帰って、きたんだ。

生まれて初めて訪れる町。

だというのに、ずいぶん長く離れていたような気分だった。

こみ上げる感情を抑え、手早く荷物を背負う。

他に降りる乗客はいない。

僕は立っ
たままドアに向かい合い、
その時を待った
――

三本の赤いのぼり旗が、妙に目を引いた。

『クリスマスセール・只今開催中！ ○×商店！』

何でだろうと、雨粒の付着した窓の向こうで思案する。それは毒々しい色のせいだろうか。あるいは、曇り空の薄暗い町並みにはあまり相応しくない明るさだからか。

降り続く小雨を受けて、のぼりは少し重たげに頭を垂れているようだった。店は開いているようだが、のぼりに遮られて中の様子はうかがえない。一応、何かの店ということはわかる。

(……繁盛しないな、あの店)

僕は心の中で小さく呟いた。

ガラス越しに向けていた視線を店内に戻し、体温の戻った手をポケットに入れる。五本の指を駆使して取り出したのは、使い古した携帯。待ち合わせの時間にかすかな不安を覚える僕は、下の時刻表示に目をやった。

—— 12 / 28 10 : 03 ——

場所か時間を間違えたとは、思いたくないものだ。

旅館あてに連絡が入ったのは、昨日の夜のこと。

電話の相手は僕の顔見知りだった。結生を通じて話を聞いたらしい。待ち合わせの約束を交わしたのも、半ば必然的な流れといえる。

(……もうここに来て三日目か)

指定された場所で、僕はのんびりと暇を潰していた。

駅前にある有名なハンバーガーショップの二階、窓側の禁煙席。小雨が降り続く今は、朝とも昼ともつかない時間にあった。

店内に他の客はいない。年末の忙しい時期だ。こんな場所でゆっくりくつろぐ僕のような人間も珍しいだろう。

（……僕も、あの人と会わなきゃ、今ごろ持田の家でゲームでもしてたのかな？）

先の未来は、誰にもわからない。

接点のなかった遠い地方の町に、交わるはずのなかった人たち。

三か月前——記憶を取り戻す前の自分からは想像もつかなかった所に、僕は居る。

生まれ変わる前からの因縁がそこにあるから。

「あ、いたいた」

誰かを呼ぶ声が、鼓膜を打った。

携帯を閉じて振り返る。

声を発した女性の視線は、まっすぐこちらに向いていた——彼女が、待ち合わせの相手だ。

「久しぶりです……渡会さん」僕は軽く一礼した。

「ええ、ひさしぶりね八坂くん、元気にしてた？」

「この通り」

「そう、よかった」

渡会の声には明るさがにじみ出ている。

手にあるコーヒークップをそっと置いて、彼女は隣の席に腰掛ける。

「……結生から話は聞いたわよ。あの子と会ったそうね」

「ここに来てから、何回か」

「しかも一昨日から来たんだって？ あの子、なんであなたがこの町に来たのか不思議そうにしてたわ」

そう言っただけは薄く微笑む。

すらつとした外見に、整った顔立ちの女性だった。生地の厚いベージュ色のコートの下に黒のセーターがのぞく。首に掛けた小さなネックレスは、いつも身につけているものだろうか。

占い師というにはかなり若い人だった。成人には違いないけれど、おそらく年齢も僕とはそう離れていない。

「髪、切りました？」僕は渡会に問いかけた。

「あーこれね……あんまり長いと手入れが面倒なのよね。旅に出ると邪魔だし」

「旅？」

「そう。占いを学びに四国までね。お遍路にも行ってきたし、いろんな人に会って来たよ」

「ずいぶん遠いところに行ってたんですね」

「まあね。会いたい人がいたから……でも旅費の工面で中々苦労したわ」

黒い水面から立ち込める蒸気が、雨に濡れたガラス戸に映える。

とりとめもない談笑を、しばらくの間続けていた。渡会とは何度か顔を合わせているが、腰を落着けて話するのは今回が初めてだ。

「ふうん、そういうことがあったのねえ」

頬杖をついたまま渡会は小さく頷いた。

室内の暖房に温まったのか、コートは椅子の背に掛けている。

「……決意は揺るぎなかったわけだ。私を探していた理由もきっと同じことなのね」

ふう、と一息ついて、

「来ると思ったよ」

「どうして？」

「だってそうじゃなきゃ、きっとあなたは満足しない」

渡会の推測する通りだった。

自分自身に問いかければ、やるべきことは最初から決まっていた

のだ。それを、余計に悩んでいたから、自分の気持ちに折り合いがつくまで時間を要したというだけのこと。

現実を知ることが時として恐ろしくさえある。それでも、僕はようやく決意できた。

——この人も、それを待っていたのだろうか。

「知らないままの方が幸せなこともあるでしょうね」

渡会の落ち着いた声が、人のいない店内に響く。

「でも、あなたが本当に望んだのはそうじゃなかった。だって……あなたは自分の意志でここまで来たよね？ 経緯はどうあれ、私にはそれで充分つてもものよ」

僕は何も答えなかった。

ガラス窓につたう水滴を目で追いながら、話を聞けばかり。

僕と、かつての自分を結ぶつながりがここにある。

だというのに、僕は言い知れない不穏な空気を感じていた。

ここで見聞きした全ての情報が伝えてくる、悪寒のようなもの。何かが壊れているような、そうでないような。

「ちょっと、いいかな」そう断りを入れた渡会に、僕は我に返った。

「……何ですか？」

「うーん、これだけは言いたいと思ってさ。一応この町の住人として、あなたにひとこと言っておきたいくて」

何のことだかわからず、首を傾げる僕に、こほんと咳払いして。

「ようこそ、伊浜町へ」
いはままち

「……えつと？」

「今更とか思わないでね！」

「もうここに来て三日目なんですけど」

「うん、知ってる」

何だかよくわからなくて、苦笑いしてしまう。

それでも、少しの戸惑いはあったけれども、ひとまず僕は頭を下
げることにした――

――その言葉を口にした渡会は、ゆっくりと微笑みかけた。

含むところのない、穏やかな眼差しで、自分を見据えながら。

それは、誰も知らない里帰りを果たした人へのささやかな言葉。
なぜだかとても、温かだった。

伊浜町。

遠く離れた地方にある、海沿いの小さな都市だ。中心の平野部には住宅が立ち並び、周辺を小高い丘が取り囲む。観光地でもあり、毎年訪れる海水浴のシーズンにはちょっとしたにぎわいを見せていた。

それも冬場になれば、めったに旅行者は訪れない。だからこの時期の町の旅館は格安で泊まれるようになっていく。どの程度かというと、中学生でも小遣いを少し貯めれば払えるくらいなもの。

僕が選んだのも、そんな類の旅館だった。

「……うう、疲れた……」

テーブルに突っ伏したきり、僕は動けなかった。

（……さすがにいきなりの四時起きはまずかったかな。体内時計が狂ったとしか考えられん。やはり始発乗りは無謀だったか）

駅に着いた時点で一日分の体力を使い果たしたらしい。

このまま瞼を閉じたら日暮れ時まで寝てしまいそうだ。

心地よい感覚が体に染み渡る。

（……だめだ、風に当たってこよう）

そう、この町には行くべきところが多くあるのだ。

駅のすぐそばにある旅館に着いたくらいで休むわけにもいかない。そんな具合に気持ちを働かせて、僕は重い腰をゆっくりと持ちあげた。

目いっぱい背骨を伸ばし、肺の奥から深く息を吐き出す。

そうしてセーターの上から厚手のパーカーを着重ね、バッグを肩

にかける。玄関に目をやると、履き古したスニーカーが扉の前で待ち構えているようだった。

大きなボストンバッグを部屋に置いていく以外は、数時間前に駅を降りた時と同じ格好になる。

「部屋の鍵と……テーブルの上の財布も忘れずに」と

傍の腕時計も手にする。午後三時。真冬とはいえ、窓の外を見てもまだ日は高い。

（……行くか）

来たばかりの部屋を一瞥し、僕は冷えきったドアノブに手をかけた。

郷愁。

もつと年を重ねないと、その言葉はわからないと思っていた。うわべの意味は理解できても、そこには実感が伴わない。故郷を懐かしむ気持ちというものが、僕にはあまり呑み込めないでいた。

帰るべき家に、いつも付き合う友達——僕の身近なところにあるそれらを、懐かしいだなんて思ったことない。だから、長い間離れていた故郷へ帰る時の気持ちなんて、知るはずもなかった。

——今なら、それが少しだけ理解できる。

僕にもかつての故郷があった。

十七年も会ってない人がいた。

記憶を取り戻した今は——

（……やっぱり、知っている）

町中を歩くたびに、気付かされる。

一度も来たことがないはずなのに、町の風景には見覚えがある。

逆に、記憶にあるはずの大通りには、見慣れない建物がところど

ころに混ざっている。

脳裏に浮かぶ風景と、目の前の町並み。

どこかつながるようで、微妙に違う。

懐かしさに思わず頬がゆるんだり、けれども、よそよそしく感じたり。そんな不思議な気分が交互に訪れて、その度に心がじんと疼く。

（つたく、おかしい感覚だよ）

記憶にない場所を見るたびに、僕は町の変わりように目を見張った。

それは十七年前になかった建物だったり、逆に空き地であったり。歲月の長さに、少しだけ隔たりのようなものを感じさせた。

（変わったんだな、やっぱり）

交差点の前に立つ間も、僕はその事実を深く噛みしめていた。

十七年前も、同じ場所で信号を待っていた。

澄んだ冬の空気に、かじかんだ手を擦り合せながら。

かつて、誰も知らない一人の男が、そこにいた。

「あつた」

歩くうちに、その建物は姿を現した。

人づてに聞き出した住所を頼りに、迷いながらも何とか探し当てた場所。町の中心部からちよつとばかり歩いたところにある、これといった特徴もない住宅団地。

そこには、あの占い師が暮らしているはずだった。

敷地と道路を区切る、錆びのついたフェンス。その内側に、住宅団地は立ち並ぶ。無機質な建物。けれど、ベランダを見る限り、かなりの割合で人が住み着いているようだった。

敷地内の一角には公園が設けてある。小さな子供が何人か、そこで走り回って遊んでいる。さらにフェンス沿いに歩くと、ようやく入り口の一行き着いた。

関係者以外立ち入り禁止、の看板が目に入る。

（さてと、早いとこ済ませようかい）

僕は躊躇なく足を踏み入れた。

この団地に渡会佳苗は住んでいるらしかった。それも、占い師として伊浜町でそれなりに有名だったことが幸いして、彼女の居場所を割り出すにまで時間はかからなかった。

同じような建物が並列する中を目指したのは第二棟。

入り口脇の郵便ポストを確認する。渡会の名前はあった。三〇八号室。そばの階段を利用して三階へ。

足はぬかるみを進むように重い。この日だけでも普段の倍以上歩いている。朝抜けに長距離の移動の後、休む暇もなくこの町をくまなく散策したのだ。加えて僕は日ごろあまり運動しない。初日から既に体力は限界を超えていた。

最後の一段を上ったところで、思わず両膝に手をついた。

嘔吐するような姿勢で息を整える。

心なしか、こみ上げるものが胸に。

（……絶対、生まれる前の頃より体力が衰えた。ちくしょう、これ高校生が言うセリフじゃないだろ！）

渡会の部屋はちょうど奥から二番目にあった。

表札を確かめるために、扉の前に佇む。夕暮れの公園から子供の声が響く。対して部屋の中からは物音ひとつない。そばには格子窓が取りつけてあるのだが、そこにも明りらしきものは見えない。

「……んん？」

試しにチャイムを鳴らす。

いくら待っても、出ない。

間が悪かったらしい——僕はため息をついた。

（困ったな。さて、どうしよう？）

この町を探索するうえで、事情を知る彼女の協力が必要だった。もちろん自分一人の力で調べることもできるだろうけど、それでは手間がかかるというもの。それに、滞在時間は限られている。何しろ一人で遠い町まで来ているのだから。旅行者である以上、あまり長居することもできない。

旅行前に立てた計画が滞ることは予想していたけれど、早くも変更を迫られる。

残された選択肢は二つ。

このまま少し待ってみるか、次の行動に移るか。

もしかしたら買い物に出ているだけかもしれない。けれど、粘り続けて、結局帰ってこないとなると、それは時間の無駄というものだ。

（こういうのって、入れ違いに帰ってきたりするんだよなあ。そうしたらなんだか悔しいし……）

次に向かう場所は、町のはずれにあつて少し遠い。できるなら、日が暮れるまでに済ませておきたい場所だ。

そんな具合に考えを巡らせていた僕は、ふと足音を耳に拾った。階段を上る音。団地の住民だろう。自分が不審者に思われたら面倒だなと思いつつ、足音が上の階へ過ぎるのを待つ。

しかし、そうはならなかった。

足音の主はこの階の住人だった。同時に僕は、あっと声を上げた。

「……っ!？」

反応したタイミングは向こうも同じだった。それは、互いを知っているからこそ表れた反応——あり得ない状況に対する、感情表現。

「中条さん!？」

発した声は、廊下の数メートル先にいる少女にむけてのものだった。

「あなた、確か……」

「待つて、どうして君がここに？」

「……私が聞きたいわよ。なんで、こんな所に居るの？」

「いや、僕は」口を開いたところで僕は気付いた「……ああ、そうだった。君はたしか、渡会さんの隣に住んでいるはずだったね。あれは部屋が隣っていう意味か」

「誰からそんなことを聞いたの」

「渡会さんからだよ。覚えてないかな？」

「……あのスタジオで会った時？」

「そう。その渡会さんに会いに、ここを訪れたってわけなんだ」

「なに、それ……」

彼女の目が不審の色に変わっていく。

疑心を抱いたらしい。眉をひそめるといふ表現が似つかわしいくらいに。

「言い方が悪かったかな。僕は渡会さんに少し用があつてこの町に来たんだ。でも、今はいないみたいだから、これから帰ろうとしていたところ」

「……………」

「え、と。変な意味はないよ……?」

彼女から発せられる、冷たく重い空気。

確実に疑われている。彼女の表情、示す態度に、漂う雰囲気。僕に身構えていることはひしひしと伝わった。

話しかける隙が見つからなくて、沈黙が続く。

「誤解は、しないでほしい」

それでも僕はあえて語りかけた。

「……、ここで待っても意味はないわよ」ぼつり、と声を漏らした。
「佳苗は明日の夜まで戻ってこない。だから、待つだけ無駄。早く帰ったら？」

言葉尻に、強い拒絶がにじむ。

彼女は一步步こちらに寄ってくる。だがそれは戻ろうとする部屋の位置関係からだ。僕に向けられた眼差しに、好意とか親和のよくなものは欠片もない。

「出かけているか。それじゃ仕方ないな」僕はやんわりと言った。

「教えてくれてありがとう。じゃあ、一つ頼みごとをしてくれるかな」

真剣な面持ちで彼女と相對する。

「……頼みごとって？」

「うん。渡会さんが帰ってきたら、僕がここに来たことを伝えてほしいんだ」

部屋の前で鍵を取り出しながらも、彼女の視線はわずかにこちらを向く。

「一応、中条さんに連絡先を教えておくよ。そのアドレスにかけるよう伝えてもらえないかな？」

メモ帳を割いて、殴り書きしたアドレスを渡す。彼女は半ば戸惑いがちに、しぶしぶ受け取った。

「……ね、これだけ教えてくれない？ 何の用があるの？」

「話をするだけさ」僕は答えた。「本当はスタジアムで会ったときに聞きたかったことなんだ。けど……あの時は君が何も言わずにいきなり帰ったよね。だから、渡会さんと話ができなかったんだ」

「……む」

「ばつが悪そうに目をそらす。」

「そういうわけをお願い」少し踏み込んで語りかける。「そのアドレスを渡すだけでもいいから。渡会さんに伝えてくれないかな？」

「それなら……まあ、しょうがないわね」

彼女はゆつくりと頷いた。今度は、僕に対する警戒の色は薄まったようだ。

（やり方が強引だったかな？）

人を丸め込むのはあまり好まないけれど、言っても今更だ。それに、この人ならきつと伝えてくれる。

「ねえ」

「ん？」

「名前」

彼女が静かに告げた言葉はそれだけだった。

僕は首をかしげた。

「あなたの名前、忘れた。このままじゃ佳苗に伝えられない……だから、もう一度教えてくれない？」

「八坂洋一、だよ」軽く言い放った。

「やさか、よういち」

「ちよつといいかな……これでよし、と」

念のために、渡したメモに名前を書き加える。

それをじつと見つめていた彼女は、不意に顔を上げた。

「……八坂は、私の名前を知ってる、よね？」

「だって、中条さんって呼んだでしょ」

「あ、えつと……そうだった」

「でも、名前がどんな漢字かは知らないよ。渡会さんからは『ユオ』としか聞いてないし」

「それなら家の表札に書いてある」

扉の左隣をそつと指差す。

僕は目をやった。

「中条 結生」反芻するように、口にした。「——生を結ぶ、か」

「……変な名前でしょ」

「そうは思わないな」

「どうして？」

「名前に込められた意味が、何となく伝わるんだ」

（……そして、おそらく僕は、その人を知っている）

結生にその名前を託した人間。

過去と未来を結びつける、『つながり』。

今も、生きているのだろうか。

「……それじゃあね。渡会さんよろしく」

思考を打ち切って、小さく呟いた。

ドアの前で立ち尽くす結生を尻目に、僕は足早に廊下を後にした。

——『彼女』の面影を見るようで、少し気が引けたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9656w/>

Link

2011年11月8日01時01分発行